

スピノザ『エチカ』における自然主義的プログラムとコナトゥス論

木島, 泰三 / KIJIMA, Taizo

(発行年 / Year)

2019-03-24

(学位授与番号 / Degree Number)

32675乙第238号

(学位授与年月日 / Date of Granted)

2019-03-24

(学位名 / Degree Name)

博士(哲学)

(学位授与機関 / Degree Grantor)

法政大学 (Hosei University)

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00021757>

法政大学審査学位論文の要約

スピノザ『エチカ』における自然主義的プログラムと
コナトゥス論

木島 泰三

詳細目次

〔＊提出稿の「目次」では部、章、節までを記載し、小節は省略してある〕

序論

- 1.本稿の主題
- 2.スピノザの自然主義的プログラム
- 3.本稿全体の構成
- 4.本稿のスピノザ研究史上の位置づけ
- 5.本稿の目的、および基本的方法とスタンス

第Ⅰ部 スピノザにおける内属と因果性：スピノザの決定論的行為者因果説

第1章 スピノザにおける内属と因果性をどう関係づけるか

1.実体と様態の関係は何か

実体と様態の定義 / 実体-様態間系をめぐる現代の解釈論争 / 実体-様態関係についての本稿の立場の定式化

2.スピノザの因果性の理論：内在的因果と他動的因果

内在的因果の構造：2P16Demを中心に/『エチカ』における因果連鎖の構造：1P28の読解

3.本稿の解釈と先行解釈との比較

4.能動性と受動性の再定義

無と能動をつなぐスペクトル / 個物における、「十全な観念」の所有による能動の可能性 / 現代の力の理論との対比：ハレとマデンの「力/被変容性」およびマーティンの「相補的傾向性パートナーの相互顕現」 / agere / actio の概念について：次章の主題との関連

第2章 スピノザの決定論的行為者因果説：現代の行為者因果説との比較から

1.アルカイックな因果概念としての行為者因果説

テイラーの「アルカイックな作用因概念」 / この概念とリバタリアンの自由意志説との関係 / 本稿での「行為者因果」の概念：ロウの用語法 / スピノザに行為者因果説を帰する積極的な根拠

2.現代の行為者因果説とスピノザの行為および因果の理論の比較

行為者因果説の歴史的概観／現代の代表的な論者／その理論的動機 / 意志作用説の批判と基礎行為説の支持：第1の理論的動機 / 出来事因果説の批判と力の概念に基づく因果の理論：第2の理論的動機 / ロウによる行為者因果の概念的先行性の論証：第2の動機の基礎づけ / ロウにおける基礎行為の否定とスピノザにおける基礎行為の中心性：第1の動機再論 / 自由と行為者性をめぐる一致点の所在：第3の動機について

3.決定論的行為者因果説の倫理学的含意に関する試論

自由意志説的行為論との比較 / スピノザ倫理学の積極的課題 / 「他ではあり得なかったこと」と行為者性はいかに両立するか

第3章 個物の生成消滅と様態の階層構造

1.内属関係と因果関係の統一的理解

内属関係と内在的因果関係の重なり合い / 2 種類の依存関係の不一致と思われるもの / この図式に取り込めていない事柄

2. 「行為への決定」と「有への決定」の差異

内属的依存関係は推移的であること / 「準個物」として見られた個物の変状 / 「行為の原因」と「有の原因」の依存関係の差異 / 3 階以上の変状は存在するか？

3. 個物による個物の産出の考察

複合物体または個体の形相について / 個体の消滅ないし破壊 / 個体の生成および維持の他動的原因 / 個体の生成および維持の内在的原因 / 変状の階層としての複合個体の階層

4. さらなる帰結・その 1：内属と外的帰属、および自己破壊の問題へのこの概念の適用

内属と外的帰属 / 能動と受動に関するより精密な解釈 / 破壊的変状の内属をめぐる問題

5. さらなる帰結・その 2：「水平的因果」と「垂直的因果」の見直し

第 II 部 現実的本質としてのコナトゥス

第 4 章 コナトゥス論の証明における神の力と個物の力：3P6 と 1P136 の平行性から

1. コナトゥス論の基礎をめぐる解釈状況と本章の課題

2. 3P6 と 1P36 の平行性

ステップ 1：1P25C と 1P34 の内容とその含意 ((a) 1P25C と 1P34 の内容 / (b) 1P25C への 1P34 の適用の 1P36Dem と 3P6Dem における差異) / ステップ 2：「本質の注視」に依拠した証明 / 「それ自体において見られた本質」と「現実的本質」の区別 / 「現実的本質」はどこで導入されたのか？ / 1P36Dem におけるステップ 2 の論証構造

3. 3P7 の位置付けについて

3P7 の役割 / 3P7 と 1P34 の対応関係

4. 様態の本質の二面性

神の力の二面性 / 様態の現実存在の二面性、およびヴィルヤネンのプラトン主義的解釈への批判

第 5 章 個物と変状、無時間的本質と特質：スピノザの四カテゴリー存在論

1. 「特質」および「共通概念」の存在論的位置づけ

2. 2Def2 の読解とスピノザにおける種のないし類的本質の可能性

3. 本質からの諸特質の「帰結[sequi]」関係と因果的依存関係の差異：形相因解釈への代案

4. 神的本質からの帰結関係：永遠性と無時間性あるいは「ある種の永遠性」の区別

第 6 章 コナトゥスの自然学：慣性的固執と〈偶然としての必然〉＝アナンケー

1. 慣性とコナトゥス

スピノザにおける機械論的自然観 / 「慣性的」という呼称の意味 / 慣性的固執としてのコナトゥスの非目的論的な性格 / 欲求と目的の概念の非目的論的基礎としてのコナトゥス / 慣性的固執としてのコナトゥスの階層構造 / 個物の現実的本質とその必然性：次節以降への問題提起

2. アナンケーとしての「自然の共通秩序」と個物の運命の偶然性：スピノザと古代原子論

偶然性の 2 つの意味：必然性の否定としての偶然性と予測不可能性としての偶然性 / 偶然性の第 3 の意味：没目的性としての偶然性 / 偶然としての必然＝アナンケー：スピノザと古代原子論の共通

性 / スピノザ自身のテキストに見いだされるアナンケー概念 / 個物の現実存在のアナンケー的な性格：必然主義と目的論批判の結合 / スピノザと充足理由律

3.自己保存と自己原因：近代エピクロス主義を補助線とするスピノザの有機体理論の解明

複合物体の定義と有機体の問題：問題の提起と思想史的整理 / 有機体の問題におけるスピノザと古代原子論の共通性 / 近代機械論哲学の成立以降のエピクロス主義的思索：ラ・メトリとヒューム / 近代のエピクロス主義的思索とダーウィン主義との差異および共通点 / これらの思索とスピノザの個物論との対照 / スピノザにおける自己維持性の遍在 / スピノザにおける有機体の位置づけ / 個物の力の促進および成長：新奇性としての偶然性 / 自己原因と自己保存

4.有限な個物における神的必然性の現れの総合的把握

偶然性と必然性の錯綜 / アナンケー概念とスピノザの自然主義プログラムの2つの課題の関わり

第 III 部 スピノザの力の形而上学：〈現動的な力〉としてのコナトゥス

第7章 スピノザにおける力あるいは傾向性の概念：〈現動的な力〉としてのコナトゥス

1.現代形而上学における傾向性あるいは力

2.スピノザにおける力あるいは傾向性

力としてのコナトゥス / 力としてのデテルミナチオ / コナトゥスとデテルミナチオの関係

3.スピノザ主義的な「力」の存在論的定位

スピノザの「力」の位置づけとその〈現動的な力〉としての性格 / 〈現動的な力〉と〈可能的な力〉の差異、およびスピノザにおける前者の中心性

第8章 スピノザ主義的な力の形而上学の可能性・その1：唯現実論的な力の概念

1.行為者因果の理論と唯現実論的な力の概念

2.スピノザの必然主義および唯現実論の形而上学的位置づけ

スピノザの作用因的必然主義 / 真理様相としての必然性に関して

3.スピノザにおける〈可能的な力〉の位置づけ

統制された無知としての抽象 / 「偶然」と「可能」の差異 / 〈スピノザ的他行為可能性〉の内実 / 抽象的なタブローとしての〈可能的な力〉ないしスピノザ的他行為可能性 / スピノザにおける〈現動的な力〉の中心性再論

4.現実存在しない個物についての定理(2P8)の唯現実論的な読解

第9章 スピノザ主義的な力の形而上学の可能性・その2：目的論なき力の概念

1.目的論的な力の概念とそうでない力の概念

2.モルナーの力の理論とスピノザの力の理論の対比

現代における力の実在論の主張 / モルナーの非還元主義的な物理的志向性 / スピノザにおける志向性の基礎としての1Ax4 / 1Ax4の認識規範としての機能

3.自己保存概念の拡張と〈常に顕在的な力〉の概念の普遍化

モルナーによる「多遺伝子/多面発現」概念の拡張と「顕現」と「結果」の峻別 / この概念とスピノザの理論との比較 / 常に顕在的な力の概念 / 2つの力の形而上学の対照

第 10 章 「形相因」および「流出因」解釈との比較：ヴィルヤネンの解釈を中心に

1. ヴィルヤネンの解釈の概観
2. ヴィルヤネンの解釈の二世界論的性格
3. 「流出因」概念の二義性

機械論的な作用因概念との対立 / ヴィルヤネンにおける 2 種類の流出因の混同 / アマルガムな流出因概念の問題点：始動状況も因果的基盤も不要とする力 / 流出因とヴィルヤネンの解釈のプラトン主義的性格 / 形相因解釈とその近傍に位置する解釈全般について

終章：スピノザの自然主義的プログラムの成否

1. スピノザの世界とスピノザの自然主義的プログラム
2. 自然主義の極限と擬人主義

凡例

スピノザからの引用は Gebhardt 版(Spinoza 1925)のページ数を用いた。表記は G の略称の後ローマ数字で巻号を付し、その後ページ数を p. (または pp.) で記した。原テキストはゲブハルト版以外の版も参照したが、重要な異同がない場合は特に記さなかった。

各テキストの略称は以下の通り——TdIE/『知性改善論』(*Tractatus de Intellectus Emendatione*)、KV/『短論文』(『神・人間・人間の幸福に関する短論文』、*Korte Verhandling van GOD, de MENSCH en deszelvs WELSTAND*)、CP/『デカルトの哲学原理』(*Renati des Cartes Principiorum Philosophiae*)、CM/『形而上学的思想』(*Cogitata Metaphysica*)、TTP/『神学・政治論』(*Tractatus Theologico Politicus*)、TP/『政治論(国家論)』(*Tractatus Politicus*)、Ep/『往復書簡集』(*Epistulae*)。特に表記がないスピノザからの引用はすべて『エチカ(幾何学的秩序により証明された)』(*Ethica ordine geometrico demonstrata*)からの引用とする。

『エチカ』および『デカルトの原理』という幾何学的に論証された著作に関しては、以下の略号を用いて参照を行い、必要に応じてページ数を付すという形式を取った。——Praef/序言、Def/定義、Ax/公理、Post/要請、P/定理、L/補助定理、Dem/証明、C/系、S/備考、App/付録、Ex/説明、AD/感情定義、AGD/感情の一般的定義。

『知性改善論』からの引用はブルーダー版以来使用されてきた節番号を使用した。

『短論文』『形而上学的思想』からの引用は「〈部の番号〉:〈章番号〉」という形式で行った。

デカルトからの引用は、必要と思われた場合は AT 版(Descartes 1964-1974)のページ数を付した。

その他、章番号(欧語 ch.)や節番号(欧語 sec.)を付す場合やそれらによる引用を行う場合もある。

(以下、本文の要約)

序論

1.本稿の主題

本稿は、スピノザにおける個物[*res particulares / res singulares*]が、自然的世界の中で、あるいは神の実体と同一視される自然との関わりにおいて、どのように位置づけられるのかという問いを提起し、個物の存在の核心で働く力としてのコナトゥス[*conatus*]の概念に焦点を合わせる。

「コナトゥス」は字義通り訳せば「努力」だが、17世紀の自然科学では物体の運動傾向を指すためにもしばしばこの用語が用いられていた。スピノザは個物の核心に「自己の有に固執するコナトゥス」であり「行為へのコナトゥス」であるような力を据えており、本稿はこの概念およびそれと関連する概念の解明や派生的な問題の解明を順次行いつつ、その問いに適切な答えを与えていくことによって先の主題を論じる。

この主題は、17世紀科学革命期に成立し、現代まで大枠において継承されている自然科学的世界像の中に人間と人間の営みをいかに位置づけるべきか、という問いに対する自然主義的、ないし自然内在的な哲学的解答を徹底させようとした哲学者としてスピノザを位置づけ、その解答の内実を解明しようという、より大きな思想史的、哲学的な関心から引き出された主題である。この関心に導かれ、筆者はスピノザにおける人間を含む個物一般の位置づけの解明という課題に向かい、本稿に結実する諸知見を得るに至った。

近代の自然科学的な世界像の中に人間をいかに位置づけるか、という我々の関心は、本稿の探究の方向性を定める、より具体的な参照軸をも提供する。その参照軸とはすなわち、本稿で「スピノザの自然主義的プログラム」と呼ぶスピノザの構想である。具体的に述べればそれは、

(1)自由意志概念の否定を伴う決定論[*determinism*]または必然主義[*necessarianism*]、およびその帰結としての唯現実論[*actualism*]

(2)徹底した目的論的自然観の否定

この2点を核とする新たな自然観の内部に人間を位置づけようとするプログラムである。

2.スピノザの自然主義的プログラム

このようなプログラムが『エチカ』の基盤に据えられていることは、『エチカ』第1部の「付録」の一節からかなり明瞭に読み取れる。これは本稿全体のキイとなる一節なので、本「要約」においても引用しておきたい。(本節は木島 2016 年 a の一部を含む。)

ここまでのところで、神の本性および諸特質について私は説明してきた。すなわち、神は必然的に現実存在する[*existat*]こと、神が唯一であり、自己の本性の必然性のみから在りかつ行為すること[*agat*]、神がすべての事物の自由原因であること、またいかなる仕方でもそうである〔自由原因である〕かということ、万物は神の内在に在り、神なしには在ることも概念されることもできないような仕方神に依

存していること、また最後に、万物は神によって予め決定されていた[fuerint praedeterminata]のであり、但しそれは自由な意志ないし絶対的恣意によって[absoluto beneplacito]ではなく、むしろ神の絶対的本性、ないし無限の力によってだったということ、これである。

〔中略〕

それ以外に私は、機会あるごとに、私の諸々の証明を把握する〔知覚する[perciperentur]〕の妨げになり得る諸々の先入見を取り除こうと配慮してきた。しかし、それでもなお、少なからぬ先入見が残って……いる。これから指摘していこうとする先入見はすべて、次のようなただ 1 つの先入見に依存しているのであり、すなわちそれは、人々は通常、すべての自然物が、自分たちのように、何らかの目的のために働いている〔行為している〕と想定しており、そればかりか、神そのものすら、万事を何らかの目的に向けている、ということを実確な事だと決めてかかっている…という先入見である。

〔中略〕

もしも、諸目的に関わるのではなく、ただ諸図形の諸本質と諸特質にのみ関わる数学が、人々に対して真理の別の規範を示していなかったとしたら、真理は人類に対して永遠に隠されていたであろう。

(1App)

このようなスピノザの自然主義的プログラムの実施を担う重要な構成概念がスピノザのコナトゥスの概念、あるいはより一般的には「力[potentia]」の概念であることが、考察を進めていく中で明らかになる。ここでそのコナトゥスないし力の概念の核心をごく端的にまとめるなら、神の本質には知性も意志も属さず(1P17S)、むしろそこには「力」のみが属する(1P34)、という神的実体の本質的な構造の、様態における表現こそがコナトゥスであり、そのようなものとしてのコナトゥスは、いわゆる〈可能態〉としてではなく、むしろ常に現実的で、また非目的論的な「力」として万物の本質を構成する(cf. 3P7)。それゆえにコナトゥスの概念は、人間を含む自然的諸事物は必然的な因果的力によって働くのであって、意志や知性に導かれるわけではない、というスピノザの自然主義的な思想の要となる概念となっている、ということになる。

3. 本稿全体の構成

本稿はこの解釈を 3 部構成で展開する。第 I 部はスピノザにおける内属と因果の概念の見直しから、スピノザの因果概念を決定論的行為者因果説として位置づけ、この解釈を基礎にスピノザの個物（とりわけ複合物体）に関する新たな読解を提起する。第 II 部はコナトゥス論を導出する証明のテキストの、従来の解釈を批判的に踏まえた詳細な読解を基礎に、「抽象的本質」と、コナトゥスの別称である「現実的本質」という重要な区別に着目してスピノザの存在論を見直し、それを踏まえて「コナトゥスの自然学」を明らかにする。第 III 部では、コナトゥスとしての「力」の概念が、アリストテレス的な「可能態」および「目的論」の要素を排した「現動的な力」の概念であることを、現代分析形而上学における力あるいは傾向性の理論と対照しつつ示し、そこからさらに積極的な「スピノザ的な力の形而上学」を明らかにする。

4. 本稿のスピノザ研究史上の位置づけ

本稿は英語圏におけるスピノザ解釈の動向を意識し、それらと多くの問題を共有してい

る。本稿のようにスピノザ思想への近代科学の影響の重要性を強調する解釈は、特に英語圏では一定の支持を得てきた。スピノザ哲学の（現代的意味での）自然主義的性格の強調も、やはり英語圏でデラ・ロッカなどによってなされている。また本稿は現代英語圏において、分析形而上学の興隆と共にスピノザ哲学の積極的な読み直しがなされてきたという研究動向を肯定的かつ反省的に取り入れ、より現代的な、分析形而上学におけるアリストテレス主義の復興と関連する主題を、スピノザ思想におけるスコラ学と連続的な要素と関連づけながら、解釈の中に積極的に取り入れる。但しそれはスピノザの近代性を否定するためではなく、むしろスピノザの近代性ないし革新性の所在を明確にするためになされる。つまりスピノザが用いていた用語法により忠実に立ち返ることで、スピノザ思想の革新性をよりクリアに取り出すことを目指す。

5. 本稿の目的、および基本的方法とスタンス

本稿が目指すのは、あくまでもスピノザが残したテキストの、できる限りスピノザ自身の思想に忠実な解釈を得ることである。本稿はしばしば、合理的再構成の作業や、現代哲学の諸理論の解釈への援用、比較思想的な考察（とりわけ古代原子論とスピノザ哲学の類似性の強調）など、外在的な手法による解釈に訴えるが、それらはあくまで、最終的にはテキストの忠実な読解という目的に従属する。

第 I 部 スピノザにおける内属と因果性：スピノザの決定論的行為者因果説

第 1 章 スピノザにおける内属と因果性をどう関係づけるか

本章ではスピノザにおける実体-様態関係の本性とスピノザにおける因果性概念の内実に関する理解を確定させ、本稿全体の基礎を固める。（本章は木島 2013 年 b 前半の加筆改稿である。）

1. 実体と様態の関係は何か

スピノザ哲学の中心概念の 1 つである「実体」と「様態」は以下のような簡略な定義のみがなされ、これらの概念それ自身に関するそれ以上の詳しい説明を欠く。

実体とは、それ自身において在り、それ自身に基づいて概念されるもの、言い換えれば、その概念を形成するのに他のものの概念を必要としないものである、と私は解する。(1Def3)

様態とは、実体の変状、すなわち他のものの内に在り、他のものに基づいて概念されるものである、と私は解する。(1Def5)

これらは伝統的な、主語と述語に対応する存在者の間に成り立つ「内属」関係（実体への様態の内属）を示すように見えるが、スピノザは唯一実体を「神」、有限な様態ないし実体の変状を「個物」として位置づける(1P14; 1P25C 他)。ここで、個物＝様態と神＝実体の関係をどのように解するかについての解釈上の対立が存在する。1 つは、伝統的な「実体/様態」の用語法に忠実に、個物とは神の実体に内属する何かだとする解釈（ジャレット、ベネット、カリエロ、メラメッドなど）。もう 1 つは、神とは個物を因果的に制約する普遍的

な自然法則であり、両者の関係は内属ではなく因果関係の一種である、とする解釈である（カーリー）。

解釈史としては、古くから存在してきたのは第 1 の解釈であるが、1960 年代末にカーリーが、論理実証主義への批判と分析形而上学の興隆の動向の中で第 2 の解釈を提起し、スピノザの現代的な読み直しを図って多大な影響力をもった、という経緯がある。そしてその後、分析形而上学の中でのアリストテレス主義の見直しが進み、例えばアリストテレスの「個別的偶有性」概念の復権とも言えるトロブ説の興隆などを背景にして伝統的解釈の復権が改めて進んだのである。

本稿はこのような動向も視野に入れつつ、第 1 の伝統的解釈（ないし、新・伝統主義的解釈）を採用し、スピノザにおける存在者をさしあたり以下の表のように分類する。

(1)実体	究極の主体。永遠かつ無限の神のみがこれに相当する。
(2)様態	実体を主体とする変状。無限様態と有限様態（個物）に分けられる（思惟の有限様態としては人間精神、延長の有限様態としては人間身体がその実例）
(3)様態の変状	様態を主体とする変状（人間における思惟の変状としては理解や知覚の他、想像、感情、欲求をも含む「観念」、延長の変状としては身体内の運動や広義の身体的行為などがその実例）

しかし『エチカ』の中にはまた、カーリーの解釈に基礎を与える、神の実体が、個物をはじめとする諸様態の原因（さらに言えば作用因）であるという叙述も多数見いだされる（e.g. 1P16C1）。本稿はこのようなテキストをも無視しない解釈を目指すものであり、次節ではそれを試みる。

2.スピノザの因果性の理論：内在的因果と他動的因果

本稿はまずスピノザによる内在的原因(*causa immanens*)と他動的因果(*causa transiens*)の区別の重要性を指摘し、また前者のような因果関係が神と様態の間に成り立っているのみならず(1P18)、有限な事物においても見いだされること(cf. 3Def2 他)を示す。

有限な事物間の因果について言えば、内在的原因と他動的原因の協働によって結果が生み出されることが、以下の叙述から引き出される。

...何らかの物体が変状される際のすべての諸様式は、変状する物体の本性と同時に変状される物体の本性から帰結する[sequuntur](2L3 の後の Ax1)。それゆえに、それら〔変状される際の諸様式〕の観念は(1Ax4 により)双方の物体の本性を必然的に包含する。従ってまた、人間身体が外的物体によって変状される際のあらゆる諸様式は、人間身体の本性と外的物体の本性を包含する。Q.E.D (2P16Dem、強調引用者)

ここで示されているのは、(1)他動的原因である事物、(2)内在的原因である事物、(3)両者

が協働的に産出する、(2)に内属する変状、という3項からなる因果関係である。

以下に挙げる定理は、個物間の因果関係における他動的因果の不可欠性と、それゆえの、有限な事物の因果の無限連鎖を示している。

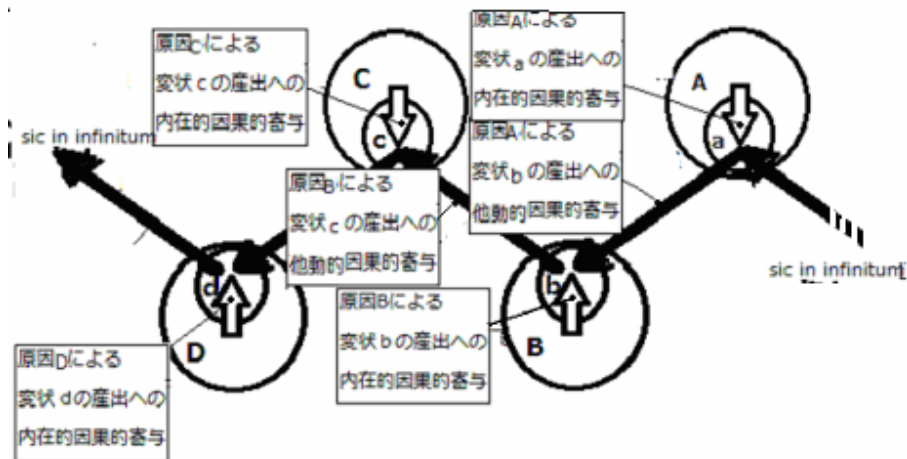
各々の個物、あるいは何であれ有限で限定〔決定、規定〕された現実存在[*exsistentia*]をもつ事物は、他の、それもまた有限で限定された現実存在をもつ原因によって現実存在および働き[*operandum*]へと決定されない限りは、現実存在および働きへと決定されることができない。さらにこの原因もまた他の、それもまた有限で限定された現実存在をもつ他の原因によって現実存在と働きへと決定されない限りは、現実存在と働きへと決定されることができない。このようにして無限に続く。(1P28)

この定理は、有限な事物ないし個物の間に成り立つ因果関係に関して、以下の2種類の事例を含んでいる。

- (a)ある個物が他の個物を一定の働き（＝変状）へと決定する
- (b)ある個物が他の個物を現実存在へと決定する

これまで論じてきたモデルがそのまま当てはまるのは(a)であり、本章と次章ではこの事例をもっぱら扱う。(b)は個物（とりわけ複合物体である個物）を構成する因果作用であり、これをどのように位置づけるのかは第3章の主題となる。(なお、公開審査における上野修氏の用語を使用すれば、(a)は「変状因果」、(b)は「構成因果」と呼び得る。但し筆者は(b)もまた変状因果の一種であると解している。)

上述の(a)の事例を図で示せば以下のようなになる。



すなわちまず、個物 A が働き a を個物 B に及ぼし、個物 B を働き b へと決定するとする。働き b は、他動的な原因である A と、内在的な原因である B の協働として産み出され、両者の本性を含む。さらに、働き b は B の外部の事物内に結果 c を他動的に産出するが、そこで結果 c は個物 C の内に、C の変状ないし働きとして産み出される。その産出もやはり、他

動的原因となった B と、内在的原因 C との協働としてなされる。そして今度は C が、C の働き c を通じて、C の外部の個物 D を、個物 D との協働的因果によって、働き d へと決定する。このように、ある個物の働きが、その個物をその働きへと決定した他動的原因と、当の個物自身である内在的原因の、いわば協働として生じ、さらなる諸結果をその働きの主体の外部に産出するという過程が無限の連鎖をなす。以上がこの定理が述べる個物間の因果のあり方である。また、図中の *sic in infinitum* は、同様の連鎖が前にも後にも無限に続くことを示している。

3. 本稿の解釈と先行解釈との比較

本稿は、神の実体と様態の関係をもっぱら因果関係とのみ解するカーリーの解釈を退け、両者が因果関係であると共に内属関係でもあることを認める点でギャレット、デラ・ロッカ、メラメッドに同意する。ギャレット、および特にデラ・ロッカは内在的因果と他動的因果の区別を考慮せず、すべての内属関係とすべての因果関係を重ね合わせるが、本稿はメラメッドと共に、内在的因果と他動的因果を区別し、内属関係と重なり合う因果関係は前者のみであると主張する。しかしながらメラメッドが内在的因果について、ほぼ内属関係と変わらない無時間的な依存関係を理解する一方、本稿は内在的因果が時間内での継時的因果を含む本来の作用因的因果関係である、という解釈を打ち出す。この作用因的な内在的因果の概念に適切な経験的内容を与えるのが次章の課題である。

4. 能動性と受動性の再定義

以上の考察は、「能動性」と「受動性」の再定義を可能にする。すなわち、個物における内在的因果と他動的因果の協働の普遍性という帰結にもとづき、無と能動をつなぐスペクトルの中間地帯としての「受動」を位置づけることが可能になる。

続いて本稿はこの解釈を、現代のハレとマデンによる「力(power)」と「被変容性(liability)」の区別、および、マーティンやヘイルが提起する「相補的傾向性パートナーの相互顕現」の概念と対比し、スピノザの思想の独自性の所在を考察する。

第2章 スピノザの決定論的行為者因果説：現代の行為者因果説との比較から

内在的因果を作用因的因果と解する場合、〈主体と変状（主体の状態や行為）の間に成り立つ作用因的因果関係〉という概念に理解可能な内実を与える必要がある。この手がかりを概念史および現代の行為論に求め、スピノザの因果概念が決定論的な行為者因果であることを示すのが本章の課題となる。（本章は木島 2013 年 b 後半の大幅な加筆改稿である。）

1. アルカイックな因果概念としての行為者因果説

リチャード・テイラーは前近代科学的、ないし前ヒューム的な「アルカイックな作用因概念」としての行為者因果概念について、以下のような特徴付けを与えている。

- (1) 作用因とは元来、一様性や法則性とは独立した概念であること、
- (2) 作用因とは元来、出来事や過程や状態ではなく、対象[object]ないし実体[substance]だと解されてきたこと、

- (3)作用因は「行使された力[exerted power]」と解されてきたこと、
- (4)それが与えられると結果が生じねばならないという「因果必然性」の概念を含んでいること、
- (5)原因が過去に遡及することはないこと

本稿はスピノザの因果概念がまさにこの概念に相当し、そのように見るとき、内在的因果を作用因的な因果と見なす解釈が自然に了解されると主張する。

行為者因果概念は現代においてリバタリアン（自由意志肯定論者）の立場とのみ結びつくものとして理解されているが、テイラーは自由意志説と行為者因果説の論理的結びつきを否定しており、またE・J・ロウが無生物にも一般化される行為者因果概念として提起した「実体因果(substance causation)」の概念は、決定論的な自然過程にも適用されるものとして位置づけられている。近年ではデレク・ペレブームのようなハード・デターミニストがロウの実体因果の概念を取り入れ、決定論的行為者因果概念を肯定的に打ち出すような流れも存在する。

このように本稿はスピノザの因果概念をアルカイックな因果概念として位置づけるが、これはスピノザの因果概念があらゆる点で前近代的だという解釈ではない。喩えて言えば、脊椎動物と昆虫という、それぞれ別の仕方で高度に複雑化した群を比較するために、両者の共通祖先である原始的な生物を参照する必要があるのと似た仕方で、現代の我々が、スピノザなりの仕方で近代化（つまり近代科学の知見への適合）と洗練を施した因果概念を理解するために、このような前近代的な因果概念への参照が有益だということである。

さらに、スピノザに行為者因果説を帰する積極的根拠も存在する。すなわち、この解釈によれば、〈自然物の出来事因果/人間の自由意志説的行為者因果〉という二分法を廃棄し、万物に決定論的行為者因果を見いだす一元的理解が可能になるのである。

2.現代の行為者因果説とスピノザの行為および因果の理論の比較

行為者因果説として概念化される因果理解は古代から存在してきたが、現代の行為者因果説は1960年代頃から、リバタリアンの論者たちによって提起されてきた。その時期からの支持者としてはチザムおよびリチャード・テイラー、より近年の支持者としてはオコナーとロウがいる。

タールバーグによれば、現代の行為者因果説には以下の3つの主要な動機がある。

- (1)基礎行為説の支持
- (2)出来事因果説の批判と力の行使としての因果概念の提起
- (3)自由意志と道徳的責任の確保

この内の(1)(2)はスピノザにも見いだされる。さらに言えば、(2)の点で最もスピノザの決定論的行為者因果説に近い因果概念を提起しているロウは、それ以前の行為者因果論者が支持していた(1)を退けて古典的な意志作用説に後退し、またスピノザで言えば他動的因果に当たる因果概念のみを許容することで、出来事因果説に接近する。スピノザの立場は、基礎行為および行為者と行為の間の作用因的な因果関係を認めるという点で、(1)(2)に関し

て言えばより徹底した行為者因果説となっている。

他方で(3)に関してはスピノザの現代のリバタリアンの行為者因果説の支持者は先鋭に対立する。但しスピノザにおいても、スピノザ固有の意味で理解された「自由」を「行為者性」が支えるという筋道は認められる。この点の比較は次節でなされる。

3.決定論的行為者因果説の倫理学的含意に関する試論

本節では、前節末の課題を引き受けると共に、スピノザの決定論的行為者因果説からの諸帰結をより具体的な局面で明らかにするために、現代の自由意志説とスピノザの立場を行為論において比較する。

自由意志説的行為論は、以下のような現象を「自由意志」の存在によって説明する。

- (1)動機は「必然化〔強制〕せず、傾ける」と言われる弱い方向付けのみをもつ。
- (2)動機が与えられた場合も、行為者は複数の他行為可能性に開かれている。
- (3)行為者はその中から選択を行うが、その選択は自由で非決定なものであって、事前の予測は不可能である

しかしこれらの現象については、スピノザの決定論的行為者因果説の立場からも理解可能な説明が可能である。但し、スピノザ倫理学はこれらの現象と関連する個々の場面での決断よりも、それを可能にする自己形成の局面に重きを置く立場であることに注意すべきである。

これ以外に、「他ではあり得なかったこと」と行為者性はいかに両立するかという問いかけについて、本稿はまず内的な必然性と外的に課される必然性を区別し、また後者に関しても内的な行為者性からの寄与が無ではないこと、そしてスピノザにおける外的必然性とは、突き詰めればすべて諸個物の内的必然性の総体である、という点を指摘する。

第3章 個物の生成消滅と様態の階層構造

本章では、個物の現実存在そのものが他の個物によって産出される局面を解明する。(本章は木島 2012 年 a の加筆改稿である。)

1.内属関係と因果関係の統一的理解

以下の定義および公理から、内属関係と因果関係とは、いずれも存在的かつ概念的な関係であり、多くの事柄において重なり合っていることが分かる。

様態について私が解するのは実体の諸変状[affectiones]あるいは、他のものの内に在り、またその他のものによって概念されるようなものである。(1Def5)

結果の認識は原因の認識に依存し、かつそれを包含する。(1Ax4)

しかしこの2種類の依存関係には、以下の3点の不一致も指摘され得る。

- (1)包含関係が逆転していること
- (2)内属関係のすべてが行為と行為者の関係ではないこと
- (3)内属関係でないような因果関係としての、他動的因果関係が存在すること

(1)に関しては、1Def5 で示されている内属関係も、1Ax4 で示される因果的な包含関係も、単純な包含関係ではなく、関係項相互の極めて独特な内的依存関係を表示するために用いられていること、また、表現上の逆転は、単一の依存関係を把握する際の2通りの見方に対応していると考えることができる。

(2)に関しては、静的な変状の単なる維持も、その個物の「自己維持の力」の行使として理解することで、内属と因果の重なり合いを維持することができる（なおこれは、第4章以降のコナトゥスの二側面の議論に直結する）。

(3)の局面においては、たしかに重なり合いは成り立たない。しかしこれは、因果関係の方がより広いカテゴリーであり、内属関係と重なり合っている因果関係としての内在的因果関係は、その部分集合であるということを示すものである。

この点を確認した上で、この図式に取り込めていない2つの関係を指摘する。1つは、「多から一」および「一から多」の因果関係であり、これは第9章で論じられる。もう1つは、ある個物が他の個物を現実存在へ決定する過程、つまり個物が構成ないし産出される過程であり、この過程の解明が本章の課題である。

2.「行為への決定」と「有への決定」の差異

本稿は個物をあくまでも実体に内属する変状として扱う。この点から、いくつかの予備的な考察を行う。

まず、内属的な依存関係は推移的な関係であり、個物に内属する変状は、個物を内属させている神的実体に内属するとも見られる。

また、個物が変状であるのと同様、「トロープ」説のように、個物の変状を「準個物」と見なすことも可能である。しかし同時に我々は、変状をその主体＝内在的原因である個物から切り離し「準個物」として理解するとき、その認識は非常に制限されたものとなることもまた見いだす。

ある個物の、他の個物からの「行為（や状態）への決定」は、行為（や状態）の主体となる個物の内在的な因果力が無に帰されない限り、常に部分的な被決定に留まる（本稿第1章第4節参照）。一方、変状である何かと、その変状の主体との因果的依存関係、すなわち、その変状の、「有の原因」からの「有への決定」は全面的な被決定の関係である。

本節の考察はまた、個物の変状を主体とするさらなる変状、すなわち3階以上の変状が存在するかどうかという問いかけを開く。この問いに明確な決着をつけるテキストは存在しないが、本稿はその可能性を許容する。

3.個物による個物の産出の考察

以上の予備的考察を踏まえて、本節では個物が他の個物から現実存在へと決定される、あるいは他の個物によって産出されるという局面を考察する。（なお、本節は本稿において重要な局面であると共に、公開審査において質問が集中した箇所の1つでもあるので、や

や詳しい内容紹介を行う。)

個物の産出とは、複合的な個物がその諸要素から構成される過程と見なすことができる。それゆえ本稿はまず、以下のような複合物体または個体の定義に着目する。

何らかの、同じ大きさ、ないし様々な大きさの諸物体が、互いに寄りかかるような[invicem incumbant]仕方でそれら以外の諸物体から囲まれるとき、あるいはそれらが、同じ速さまたは様々な速さで、互いに運動を一定の比で伝達するような仕方で動かされる場合、それら諸物体は互いに合一していると我々は言い、またそのすべてが同時に1つの物体または個体を構成する、と我々は言う。そしてその1つの物体または個体は、諸物体はこの諸物体の合一によって他の諸物体から区別される。(2L3C の後の Def; cf.2Def7)

これに続く一連の補助定理では、このような複合物体の同一性を定義する「形相(forma)」が、要素の物体の交替や移動等にも関わらず同一に留まる条件が規定される(2L4-7)。またこれらは「最単純物体」から構成される1階の複合物体についての規定だが、ここからさらに、1階の複合物体の複合によって構成される2階の複合物体が構成され、この2階の複合物体の複合によって3階の複合物体が構成されるというように、より高階の複合物体の形成も可能であることが述べられる。さらにこのような諸物体の複合の階層は無限に続き、最終的に宇宙全体が1つの複合物体と見なされることが示される(2L7S)。

この個物論に基づき、まずは複合物体であるような**個物の消滅ないし破壊**を考察する。最初に言えるのは、個物の消滅や破壊とは個物が完全に無に帰することではなく、その自己同一性を定義する「形相」が失われることだということである。そしてそれは個物を構成する空間領域が、(a)構成諸物体の配置が変化して別の複合物体を構成するか、あるいは、(b)いかなる「形相」も欠く、単なる集塊を構成するか、いずれかに至るような過程である。

このような個物の破壊ないし消滅の逆を考えると、**個物の産出ないし構成**が理解できるようになる。

まず、個物の産出とは個物の素材の「無からの創造」ではなく、個物の形相の形成であり、それは単なる集塊、または別の形相を備えた複合物体から、当の個物の形相を備えた複合物体が構成される過程だと考えられる。

第1章で明らかにした、スピノザの有限な事物相互において普遍的な、三項的因果関係の図式によれば、(1)他動的原因である個物、(2)内在的原因である個物、(3)それらが生み出す結果として(2)に内属している変状、という三項が有限な事物間の因果の基本的かつ不可欠な構成要素であった。この図式に上述の過程を当てはめるなら、(3)は変状としての個物の「形相」であり、(1)すなわち個物の有の他動的原因は、当該の複合物体を構成するはずの諸物体に働きかける外的な諸原因（「多くの諸事物に変状した限りの神」(2P19Dem))であり、そして(2)すなわち個物の形相を内属させる個物の有の内在的原因とは、(1)が働きかける空間領域内を満たしている諸物体である、ということになるはずである。

個物の破壊に関する考察によれば、(2)の、相互に複合されて個物を構成すべき諸物体は、(a)異なる個物の形相を構成しているか、さもなければ、(b)いかなる上位個体の形相をも構成しない端的な集塊として存在している。本稿は、これらの、個物の要素的諸部分となるべき諸物体が、(1)である外的諸原因によって決定されて自らの因果的な力を行使し、**相互**

に協働的に個物の形相を形成し、維持するという協働的な行為こそ、個物の有の内在的原因としての働きであると主張する。

ここに見いだされるのは、複合物体の階層構造と重なり合う、諸変状の階層構造である。すなわち、ある複合物体の形相を内属させる上位の主体であり、その複合物体の有の内在的原因である事物とは、その個物の部分である下位の諸物体に他ならない。すなわち、下位の諸物体が、上位の複合物体の形相を協働的に内属させる主体なのであり、それら下位諸物体が他動的原因から決定され、それぞれの因果的な力を行行使し、上位複合物体の形相を協働的に産出し、維持する内在的原因として働く。この、要素的諸物体による上位物体の協働的産出と維持という構造は複合物体の階層構造と対応する階層構造をなし、この階層は最下位に位置する最単純諸物にその基底を有する。従って最下位の最単純物体が、それよりも上位のすべての複合物体を主体として協働的に内属させ、それら複合物体の有の内在的原因として、それら複合物体の形相を協働的に産出し、維持する、神的実体に直接に内属する最上位の変状である、というのが本稿がスピノザの中に見いだす諸変状の階層構造のあり方である。この解釈からは、スピノザ哲学の「一元論」的解釈と「粒子論」的解釈の両立ないし相互置換可能性が引き出される。

4.さらなる帰結・その1：内属と外的帰属、および自己破壊の問題へのこの概念の適用

本章の解釈からのさらなる帰結として、第1に、内在的因果に対する内属関係に相当する、他動的原因と結果の間の帰属関係としての「外的帰属」（ないし「外属」）の概念を挙げることができる。本節ではこの「外的帰属」概念の導入により、しばしば問題とされる自己破壊の変状の問題に明確な解決を与える。

5.さらなる帰結・その2：「水平的因果」と「垂直的因果」の見直し

本章の考察からの第2のさらなる帰結は、解釈上「水平的因果」と「垂直的因果」の区別と呼ばれてきた因果理解の見直しである。本章の解釈から導かれるのは、1P28において述べられている個物の無限の因果連鎖の過程には、たしかに水平的因果が含まれていると同時に、すでにミニマルな垂直的因果が含まれている、ということである。従って〈実体-直接無限様態-間接無限様態-無限個の有限様態〉という、伝統的にそれのみが「垂直的因果」として見られてきた階層は、有限様態間にも存在する無限に高階の階層構造と究極の主体である実体との間をつなぐ、最も上位の垂直的因果を述べたものとして位置づけ直されることになる。そもそも、水平的でしかない因果関係はスピノザにおいては場をもたないのであり、本稿がこれまで一貫して提起してきた〈他動的原因-内在的原因-結果としての変状〉という因果の三項モデルは、スピノザにおける因果関係が常に、根本的に垂直的因果の側面を備えていることを示すものであった、ということになる。

第II部 現実的本質としてのコナトゥス

第4章 コナトゥス論の証明における神の力と個物の力：3P6と1P136の平行性から

本章よりコナトゥス概念を明示的に論じる。（本章は木島2013年cの改稿である。）

1.コナトゥス論の基礎をめぐる解釈状況と本章の課題

本章の主題はコナトゥス概念を導出する 3P6-3P7 の証明の見直しである。従来、3P6 の証明(3P6Dem)に対しては、いくつかの不備が指摘されてきた。その中の重要なものとして、この証明が単なる無時間的な対立ないし矛盾の関係から、力動的な「抵抗」の働きを導出しているように見える点に飛躍を見いだすという、ベネットに代表される批判的指摘がある。これに対して本章は、リン、マニング、河村、ヴィルヤネンと共に、従来の解釈論争がこの証明の後半のみに目を向けてきた点を批判し、証明前半に目を向けた上で、証明前半と後半がなぜいづれも不可欠な論証であるのかについて、従来よりも明確で説得力ある根拠を提示する。

2. 3P6 と 1P36 の平行性

本章は上記の課題に取り組むために、3P6 およびその証明を単独で考察するのではなく、それが 1P36 およびその証明と平行的な構造を備えているという点に着目し、その意味を解明することで上述の課題を解決する。3P6 と 1P36 のテキストと、いくつかのステップに分析されるそれらの証明は、下記の通り。

その本性から何の結果も帰結し〔生じ sequantur〕ないようなものは現実存在しない。(1P36)

各々の事物は、自己の及ぶ限り、自己の有に固執しようと努める。(3P6)

〈1P36：ステップ 1〉 現実存在するものはいずれも、神の本性あるいは本質をある一定の、かつ決定された様式で表現する(1P25C により)。つまり、(1P34 により)各々の現実存在するものは、すべての諸事物の原因であるところの神の力を、一定のかつ決定された様式において表現し、

〈3P6：ステップ 1〉 なぜなら個的諸事物[*res singulares*]は神の属性を一定の、かつ決定された様式で表現する様態である(1P25C により)。つまりそれらは(1P34 により)、神がそれによって在りそれによって行為するところの神の力を、一定のかつ決定された様式で表現する諸事物であり、

〈1P36：ステップ 2〉 従ってまた(1P16 により)、

〈3P6：ステップ 2〉 またいかなる事物も、それ自身の内に、それによって破壊されるようなもの、すなわちその存在を除去するようなものを有することができず(3P4 による)、むしろ反対に、その存在を除去し得るものに対立させられている(3P5 により)。

〈1P36：結論〉 そこから何らかの結果が帰結しなくてはならない。Q.E.D.

〈3P6：結論〉 従って、それはなし得る限り、また自己の及ぶ限り、自己の有に固執しようと努める。
Q.E.D.

ここで「ステップ 1」は 1P25C と 1P34 に根拠をもち、これは証明対象である個物の力が 31P36 においては「すべての諸事物の原因であるところの神の力」であり、P6 においては「神がそれによって在りそれによって行為するところの神の力」の表現であることを示す。一方、「ステップ 2」は読者に証明対象の注視を求め、そこから引き出される真理を証明に役立てるという共通の構造を備えている。ステップ 1 が明らかにしているのは個物の

「現実的本質」の側面であり、ステップ 2 で証明に援用されているのは個物の無時間的、抽象的な本質である。抽象的な本質は諸事物に関する重要な真理（1P36 においては「本質からの諸特質の帰結」、3P6 においては「事物の自己破壊の不可能性」）を我々に告げるが、同時にそれは個物を、自己の本質に現実存在を含む神の因果的な力から切り離して考察することを伴う。それゆえそこで捨象された個物の現実存在と因果的な力を示す作業が別途必要なのであり、それを担うのがステップ 1 だということである。このように、個物の現実存在とそこで働く因果的な力を捉えるための用語が、抽象的な本質と対比される「現実的本質」であり、それは個物に働く神の力そのものに他ならず、このような力が個物に働いていることは「様態」の定義に含意されていたが、それが明示されるのが 3P7 であったということになる。

3. 3P7 の位置付けについて

3P7 の証明は以下の通りである（文中の番号は引用者による）。

各々の事物自身が、(1)それによって〈単独で/他のものどもと共に〉、各々の事柄を〈行う/行おうと努力する〉ところの、また、(2)それによって自己の有に固執しようとするところの、〈力＝コナトゥス〉、すなわち、(3)その事物の〈与えられた＝現実的な〉本質... (3P7Dem)

これは積極的な証明というよりも、これまで証明の諸帰結を「現実的本質」という新たな名の下に包括することにこそあった、と見るのが適切であるように思われる。すなわち、(1)事物の行為へのコナトゥスと、(2)事物の自己保存のコナトゥスとの同一性を確認し、最後にそれらに(3)「事物の現実的本質」という呼称を付与しており、このような規定は「証明」というよりも「定義」に近い。

以上の考察から、『エチカ』全体の骨格とも言うべき以下の構造を引き出し得る。

(a) <実体において>	
自己原因的な力(1P11)	万物の原因としての力(1P16)
上記を両面とする、神の本質としての力(1P34)	
表 ↓ 現	
(b) <様態において>	
自己保存のコナトゥス＝力(3P6)	行為へのコナトゥス＝力(1P36)
上記を両面とする、様態の現実的本質としてのコナトゥス＝力(3P7)	

4. 様態の本質の二面性

以上の考察から、本章とごく近い主張を行っているヴィルヤネンの解釈と、本章の解釈との間の、前提における深刻な相違が明らかになる。すなわち、ヴィルヤネンが抽象的、無時間的な本質こそが永遠本質であり、真実在であるというプラトンの二世界説にスピノザを引き寄せるに対し、本稿によれば現実的本質こそが真実在たる永遠本質なのであり、抽象的、無時間的な本質はその色あせた影のようなものに過ぎないことになる。

第5章 個物と変状、無時間的本質と特質：スピノザの四カテゴリー存在論

前章で明らかになった「現実的本質/抽象的本質」の対立からスピノザの存在論を見直す。

1. 「特質」および「共通概念」の存在論的位置づけ

スピノザにおける「共通概念」(2P38-40 他)およびその対象としての「特質」の存在論的地位がしばしば解釈上の問題になるが、特質の本質への依存関係と、本質について「現実的本質」と「抽象的本質」の区別が立てられることを考えるとき、特質の存在論的な位置づけが見えてくる。すなわち、現実存在する事物を抽象的に考察することで抽象的本質が見いだされるのに対応して、**現実存在する事物の変状を抽象的に考察するときに見いだされる抽象的な存在者がすなわち特質である**。それは抽象的存在者であるがゆえに様々な度合いでの普遍性を備えた普遍者としてふるまう。これを図にすると下記ようになる。

＜抽象的存在者＞	＜現実存在するもの＞
事物の抽象的本質	事物そのもの（主体）
事物の特質	事物の変状

この図式は E.J.ロウが、フレーゲ以来の「二カテゴリー存在論」（個体＝個別者/性質＝普遍者）に対置させ、「四カテゴリー存在論」と呼んだ、下記のようなアリストテレス的存在論とよく一致する。

	＜普遍者＞	＜個別者＞
＜実体＞	自然種（第二実体）	個体ないし対象（第一実体）
＜性質／関係＞	普遍的な性質／関係 （普遍的偶有性）	トロープ/様態/例化された普遍者、 すなわち個別的な性質／関係 （特殊的偶有性）

但し相違点もある。第1に、スピノザの図の左半分は右半分からの抽象物であって、存在的にも概念的にも右半分に依存しているという点。第2に神以外のすべての存在者は何かを内属させる主体として図の上半分に登場することも、何かに内属する変状として、図の下半分に登場することもできる、という点である。

2. 2Def2 の読解とスピノザにおける種のないし類的本質の可能性

スピノザの「本質」に関する規定(2Def2; 2P10; 2P10S)を単独で読む限り、「事物そのもの」と「事物の本質」の区別がどの点にあるのかは必ずしも明らかではない。しかしスピノザにおける「本質」は元来抽象的存在者（表の左側）であり、「現実的本質」や「個別的本質」とは抽象概念から出発して個物を把握することを目指す極限概念であると考えればその区別は理解し得るものになる。この解釈によればまた、現実的本質にあくまで依存した抽象的な対象として、類的本質のような普遍的本質概念を位置づけることも可能になる。

3.本質からの諸特質の「帰結[sequi]」関係と因果的依存関係の差異:形相因解釈への代案

この図は、やはり解釈上しばしば問題となる、スピノザの「本質からの諸特質の帰結(sequi)」に関しても明確な理解を与える。すなわち、「本質からの諸特質の帰結」とは、図の左半分における、下の項目の上の項目への依存関係を表しており、これは図の右半分における下の項目の上の項目への依存関係そのもの、すなわち、**内在的因果関係を無時間的に考察した、抽象的、無時間的な関係**だということである。この解釈は「本質からの諸特質の帰結」を「形相因」という因果関係の一種と見なす解釈に対する有力で、よりテキストに即した代案となる。

4.神的本質からの帰結関係：永遠性と無時間性あるいは「ある種の永遠性」の区別

およそ様態における本質からの帰結関係は現実存在と因果的な力を捨象された無時間的な帰結関係であり、このような無時間的な関係をスピノザは「ある種の永遠性」と呼び、勝義の永遠性から区別する。本質に現実存在を含む神においてのみ「本質からの帰結」と「因果的帰結」が一致し、そこには真の意味の、現実存在を含んだ永遠性が見いだされる。(なお、本節は木島 2016 年 a の一部を含む。)

第 6 章 コナトゥスの自然学：慣性的固執と〈偶然としての必然〉＝アナンケー

本章の課題は、「コナトゥスの自然学」を叙述し、スピノザの自然主義的プログラムの 2 本の柱にとって、コナトゥス概念が鍵となっていることを示すことにある。(本章は木島 2016 年 b の大幅な加筆改稿である。)

1.慣性とコナトゥス

本稿は「機械論的自然観」という用語によって、厳密な数学的法則に従ってすべての自然物が決定されている、という自然観を指している。この自然観は 17 世紀科学革命、ガリレオやデカルトからニュートンに至る近代力学の成立と共に広まったものである。本稿は、後のライプニッツ／ニュートンによる目的論の再導入とは対照的に、スピノザがあくまでも機械論的自然観を徹底させた思想家である点を重視する

本稿はコナトゥスを慣性的な〈固執＝抵抗〉の力として位置づける。ここで「慣性的」とは、コナトゥスを狭義の慣性に還元するということではない。狭義の慣性が等速直線運動への固執と、それを妨げる作用に対する抵抗の力であるのに対し、個物のコナトゥスは自己の同一性ないし「形相」に固執し、その破壊に抵抗する力、いわば個物の有機的統一の原理であるが、とはいえ固執と抵抗という発現形態において、両者を同じ型の力と見なすことができる。

狭義の慣性については、ライプニッツはそれを単純な「状態の継続」と区別される積極的な抵抗力であると特徴づけ、ニュートンは視点に応じて「抵抗」としても「勢い」としても見られる「固有力」と特徴づけた。それは慣性質量の多寡に応じた〈動かされ難さ/止められ難さ〉を構成する積極的な力と見られ得る。そして「自己の有への固執のコナトゥス」は、その多寡に応じた〈変えられ難さ〉の力であるという意味において慣性的と呼び得るということである。

慣性的固執として解されるコナトゥスは、以下の点において非目的論的な力である。

- (a) 現前する有への固執力であること
- (b) 〈固執へのコナトゥス〉と〈行為へのコナトゥス〉は目的-手段関係ではなく同一性の関係にあること
- (c) 〈行為へのコナトゥス〉は自動詞的な行為へのコナトゥスであること
- (d) 〈促進へのコナトゥス〉は〈固執へのコナトゥス〉からの派生物であること

人間においては、とりわけ想像あるいは連想の働きによって、このような非目的論的な力を核にして、本来の「目的を目指す」と呼び得る行為が生成される。この点でコナトゥスは、現代のオペラント条件付けや自然淘汰がそうであるような、目的論的行為の非目的論的な基礎と言い得る。

このような慣性的固執としてのコナトゥスは、複合物体の階層構造に応じた階層構造をなす。例えば人間において多くの身体変状が交替しても、行為主体としての人間自身は相対的に不変のままであり、人間が解体しても、人間を自らの変状として産出した〈有の原因〉ないし主体である「極めて多くの諸事物に変状した限りの神」としての外的環境と要素諸物体は相対的に不変のままである。その外的環境や要素的諸物体も決して絶対的に不変不滅ではなく、(現代の知見によれば)地球環境もやがては膨張する太陽に焼き尽くされ、諸々の有機分子もより単純な元素に分解する。しかしそれをさらに取り巻く環境や、それらのより単純な元素は、より強固な恒常性をもつであろう

また、すでに見たように、現実的本質として見られた限りのコナトゥスにおいては「行為へのコナトゥス」と「自己の有への固執のコナトゥス」は一致する。すなわちそれは〈一定の決定された行為をなしつつある自己への固執のコナトゥス〉という単一の現実的本質の二側面である。続く2つの節では、この二側面のそれぞれに関して、コナトゥスの自然学を考察していく。

2. アナンケーとしての「自然の共通秩序」と個物の運命の偶然性：スピノザと古代原子論

現実的本質としての「行為へのコナトゥス」は、単純にそのコナトゥスを備えている事物だけではなく、その個物を変状として内属させるより上位の主体（その個物の構成諸物体）およびその他動的原因である諸事物の「行為へのコナトゥス」の総体として考察され、究極的には、この宇宙全体の因果的連結の総体としての、スピノザの言う「自然の共通秩序」がすべての瞬間にすべての事物の行為へのコナトゥスをただ1つに決定する、という事態として考察され得る。

このような他動的原因の総体としての「自然の共通秩序」は、それを構成する「行為へのコナトゥス」のすべてが「他ではあり得ない」という必然性を備えている点で、最も基本的な意味での偶然性、すなわち、非・必然性という意味での偶然性を一切欠く。

他方で「自然の共通秩序」は、少なくとも2つの意味において「偶然的」と呼ばれ得る。第1にそれは、スピノザが哲学的に妥当な偶然概念として再定義した、有限な精神にとって**予測不可能**という意味で偶然的である。第2に、この意味での偶然性と重なり合いつつ区別される別の含意として、「自然の共通秩序」の**没目的性**という性格を指摘できる。

スピノザ自身は自然の共通秩序の没目的性を「偶然的[contingens]」という名で呼ぶことはないが、それを「非必然的」や「予測不可能」とはまた区別される意味で「偶然的」と呼ぶことは、日常語としても、哲学史的にも、ごく一般的な用法である。例えばライプニッツはスピノザの神的必然性を「幾何学的で盲目的な必然性」や「むき出しの必然性」と呼ぶとき、その没目的性を「偶然的」とごく近い意味合いの用語で批判していた。またこれと同じ批判は、『ティマイオス』においてプラトンが原子論者の想定する盲目的自然力としての「必然（アナンケー）」を「彷徨する種類の原因[πρανωμένη εἶδο αίτια]」や「思考を欠いてただ出まかせのものを無秩序に[τὸ τυχὸν ἄτακτον]、その時その時に作り出す原因」と呼ぶところにも見いだされる。プラトンが「アナンケー」に見いだしたこのような性格は、カローネによれば「無秩序の源泉としてのランダム性または偶然（テューケー）に等しい」であり、スーパーマンとレーヴは「偶然としての盲目的必然」ないし「偶然性という意味での必然性」と呼ぶ。スピノザの没目的論的な神的必然性は、このような「アナンケー」としての性格を古代原子論と共有している。スピノザが「自然の共通秩序」からの人間精神の被決定を「偶運的[fortuitous]」と呼ぶとき(2P29S)、単に予測不可能というだけでなく、人間の目的達成に対する妨害的な要素としての、自然の共通秩序の没目的性が指し示されていると言える。

このように、スピノザにおける必然主義と目的論批判の結合からは、個物の現実存在の「アナンケー」的な性格が引き出される。それは、〈神的必然が、他では在り得ない仕方での私を選び取り、必然化し、それに十分な根拠を与えている〉のような目的論的倒錯を中和する。またこのようなスピノザの思考に「充足理由律」を見いだす場合、それは神を含むあらゆるものに作用因がなければならないという思想を意味する。神の自己根拠づけとは、神が自己原因であり、すなわち自らの維持の内在的原因であることを意味し、個物に関しては、我々の関心や利害を顧慮しないアナンケーとしての「自然の共通秩序」を貫き、自己原因としての神に帰着する、無限に多くの諸個物の作用因の連鎖が、とりもなおさずスピノザにおける万物の〈充足理由〉のすべてである。

3.自己保存と自己原因：近代エピクロス主義を補助線とするスピノザの有機体理論の解明

本節では「自己の有への固執のコナトゥス」の自然学を論じる。第1節で、複合物体のコナトゥスは一種の有機的統一の原理であると述べたが、本節の1つの目的はその規定のより明確な意味を明らかにすることであり、この課題はスピノザの複合物体の理論に指摘され得る欠落の考察と、スピノザの徹底した没目的論的自然観の関わりを解明する中で果たされる。すなわち、スピノザの複合物体の理論は人間身体のような複雑な有機体の形成をも説明する理論であるはずだが、複合物体の定義(2L3Cの後のDef; 2Def7)は、複合物体が産出されねばならないとしたら、いかなる条件が満たされねばならないかの叙述であって、複合物体が現実にかんして、何によって産出されるかの具体的な機構や原因に関しては何も触れない。ここには1つの欠落を指摘できる。一方、思想史的に見ると、ダーウィンの自然淘汰説によって生物界の合目的的な秩序を没目的的なメカニズムによって解明する以前、古代原子論、および古代原子論の没目的論的自然観を受け継ぐ近代のエピクロス主義的思想は、デザイン論証に依拠する有神論者よりも困難な立場に立たされていたが、スピノザはまさに彼らと同じ前提を共有していた、という点にも目を向ける必要がある。

これを確認した上で、本章はラ・メトリの『エピクロスの体系』の有機体に関する説明、およびヒューム『自然宗教に関する対話』の中で対話者が語るエピクロスの宇宙論を参照し、そこにはランダムな過程からの自己維持的構造の偶発的出現、という共通した説明が見いだされ、それは本来のダーウィンの自然淘汰とは明確に区別される面をもつ一方、〈ランダムな過程＋保持の原理〉という、ダーウィンの過程に本質的な要素はたしかに備えているという考察を行い、またその同じ構造をスピノザに見いだすことも十分可能ではないかという提言を行う。

スピノザにおいて個物の現実存在は没目的な「自然の共通秩序」によって与えられることが示されているので、個物の形成が「ランダムな過程からの出現」によるという解釈は十分に成り立つ。ここで「自己の有への固執のコナトゥス」が「保持の原理」を与えると考えられれば、スピノザが有機体の形成の特定の原因を与えようとしていないことに対する理解可能な説明が得られる。すなわち、結果として自己維持的であるような構造であれば、そこでの自己維持を実現する機構がいかなるものであれ、等しく複合物体の資格をもつのであり、有機体を有機体たらしめる単一の原因を想定する必要はないのだ。

しかしこの解釈はすべての存在者の内のごく限られたグループのみにコナトゥスを帰するという点で、3P6 が求める普遍性の要求を満たしていない。この問題は、第3章で行った〈単なる集塊である空間領域/複合物体を構成する空間領域〉という区別を解体し、すべての、ありとあらゆる範囲の空間領域が、いずれも程度の差はあれ自己維持的な構造を備えた複合物体と見なされる、という一元的な見方を導入することで解消される。大小あらゆる範囲わたる、いかなる一時的で無秩序な集塊的な空間領域を構成する諸物体の配置も、少なくとも実際に現実存在し得た配置である限りは、ごく微弱なコナトゥスを備えていたと考えられる。それらと、より明確な複合物体との間には程度の差しかない。内在的原因と他動的原因からより安定した持続を引き出し得る空間領域＝複合物体であればそれだけ、あるだけより大なる自己への固執のが属し、このグラデーションの頂点には自己原因的な実体である神が位置する。スピノザは個物のコナトゥスを神の自己原因的な力の表現と見なしており、神の自己原因と事物の自己保存は同じ力の表れと解されるのである。

4.有限な個物における神的必然性の現れの総合的把握

以上の考察は、有限な個物と神的必然性との関わり方に2つの経路があることを示唆する。1つは有限者が有限者であるゆえに依存せねばならない**他動的諸原因の連鎖の〈偶然的な〉必然性**であり、もう1つはすべての有限者が現実存在に固執し続ける限りで行使されている、**神の自己原因的な力の必然性、あるいは神の現実存在の必然性**である。とはいえこの2つの力は別種の力ではなく、同じ神の力の別の面である。神の力は単一不可分であるとしても、神の有限な諸様態の各々においては、その力は**内在的な必然的力と他動的な必然的力**という二様の姿をとる。内在的力はその個物を定義する有への固執の力であり、他動的な力は、同じく自己の有に固執する諸個物間の協働や相克の総体として与えられる。このいずれも目的論的な原理を含まないという点で、スピノザにおける必然主義と目的論的自然観の批判は相伴って進む。

ここでアナンケー概念は、目的論批判と必然主義というスピノザの自然主義プログラムの2つの課題を結び合わせる役割をもつ。単独で考察された決定論は運命論、すなわち予

定調和的な目的論に容易に結びつく。古代のストア派やライプニッツの神学がその典型である。しかし、プラトンが〈偶然としての必然〉と見なして忌み嫌ったアナンケーは、没目的論的な必然性であることによって、このような反自然主義への滑落を抑止する。一方、「偶然性」は容易に決定論または必然主義からの脱出口、自由意志を呼び入れる通路と見なされる。だが、我々が向き合うべき自然の偶然性があくまで〈アナンケー＝必然〉の我々の合目的関心にとっての「偶然」である、という構造を念頭に置き続ける限り、この意味での偶然性を非決定論と自由意志説への通路と見なす道は閉ざされる。かくしてスピノザの必然性概念は、スピノザの自然主義プログラムを束ね、我々の目をこの現実の自然へと向け続ける要となる概念であると言い得る。

第 III 部 スピノザの力の形而上学：〈現動的な力〉としてのコナトゥス

第 7 章 スピノザにおける力あるいは傾向性の概念：〈現動的な力〉としてのコナトゥス

この部では現代の分析形而上学との対照でスピノザの力の形而上学を明らかにする。本章では現代形而上学における力の概念を概観し、スピノザにおけるその対応物を探る。

1. 現代形而上学における傾向性あるいは力

広く共有された概念としての傾向性[disposition]または力[power]は「始動状況[initiating circumstance]」（ないし「刺激」[stimulus]または「刺激状況」[stimulus situation]）および「顕現」[manifestation]（または力の「行使」[exercising]）と共に、1 つの法則的な関係を構成する。例えば可溶性という「傾向性」を所有する物質は、溶媒に浸されるといいう「始動状況」に置かれるとき、溶媒に溶けるといいう「顕現」をもたらす。

2. スピノザにおける力あるいは傾向性

スピノザにおけるコナトゥスおよびデテルミナチオ[determinatio]はいずれも「因果的基盤」「始動状況」「顕現」を指定でき、現代哲学の意味での力ないし傾向性で見なし得る。両者は同じ事柄の異なった側面に対応づけられ、それを図表化すれば下図のようになる。

	＜同一性保持の側面＞	＜多様性の側面＞
＜内在的原因の行為＞	自己保存のコナトゥス	諸行為へのコナトゥス
＜他動的な原因の行為＞		諸行為へのデテルミナチオ

この図表の空欄を下記のように埋めることがさらに可能である。

	＜同一性保持の側面＞	＜多様性の側面＞
＜内在的原因からの＞	自己保存のコナトゥス	諸行為へのコナトゥス
＜他動的な原因からの＞	自己表現としてのデテルミナチオ	諸行為へのデテルミナチオ

この新たに埋められた項目はスピノザ的な志向性の自然化において重要となる（第 9 章）。

3.スピノザ主義的な「力」の存在論的定位置

現代における力の概念は、「溶けていない砂糖の可溶性」のように、今現在行使されていない力、あるいは、刺激状況を与えられて行使ないし顕現へと決定づけられていない力としての〈可能的な力〉を標準とする。一方スピノザが力と呼ぶのは、〈顕現へと決定された力〉（「行為へのコナトゥス」と「行為へのデテルミナチオ」の場合）、または〈常に顕現されている力〉（「自己の有への固執のコナトゥス」の場合）としての「現動的な力」である。

第8章 スピノザ主義的な力の形而上学の可能性・その1：唯現実論的な力の概念

アリストテレスにおける力＝デュナミスはすなわち「可能態」であり、現実化されざる「可能的な力」をその本来のあり方とする。一方、本章で示すように、スピノザの唯現実論は「現動的な力」をこそ本来の力の概念とし、通常「可能な」と呼ばれている事柄に、アリストテレス主義や現代の力の理論とは非常に異なった位置づけを与える。

1.行為者因果の理論と唯現実論的な力の概念

スピノザの行為者因果の理論は唯現実論的な力の理論でありつつも、「メガラ派的唯現実論」のような力の消去を帰結しない。スピノザの場合「他であることが不可能であった」としても、生じた結果における内在的原因の力の寄与の多寡を問うことが常に可能である。

2.スピノザの必然主義および唯現実論の形而上学的位置づけ

本稿はスピノザが必然主義＝唯現実論を徹底させていることを主張するが、そこで言われている必然性は論理的な必然性、あるいは真理様相としての必然性ではなく、この世界の中での因果的決定の徹底という因果的な必然性と解される。この点で本稿はスピノザの必然主義の解釈についてギャレットよりもカーリーの解釈をより適切と見なすが、カーリーよりもさらに、メイソンの、スピノザの関心事は因果的必然性にこそあり、論理学的な必然性にはなかったという解釈をより適切なものと見なす。（なお、本節は木島 2016 年 a の一部を含む。）

3.スピノザにおける〈可能的な力〉の位置づけ

砂糖の可溶性のような「可能的な力」に当たる概念を『エチカ』の中に見いだすことはできるし、さらに言えばそれは『エチカ』の人間本性論の中で構成的な役割を演じている（例えば「自分が愛するものが破壊されることを想像する者は悲しむはずである。他方で、反対に、自分が愛するものが保存されることを想像する者は喜ぶはずである」(3P19)など）。

スピノザによれば「可能な」と「偶然的な」は我々の無知の表明であるが、抽象概念ないし一般概念は、ロックの言う *partial consideration* に似た操作によって関連しない変状を度外視することで得られる、「統制された無知」と見なすことができる。そして、「可能な」はとりわけ「偶然的な」と比較したとき、とりわけ有益な一般化を与えてくれる「統制された無知」として利用できる概念である。これを見るために、スピノザによる「偶然的」と「可能的」の定義を参照しよう。

個的諸事物を「偶然的な」と私が呼ぶのは、それら事物の本質のみを我々が注視したとき、それら事

物の現実存在を必然的に定立するものや、それら事物の現実存在を必然的に取り除くものを何も見いださない限りにおいてである。(4Def3)

同じ個的諸事物を「可能な」と私が呼ぶのは、それら諸事物がそれによって産出されねばならない諸原因に我々が注目し、それら諸原因がそれら諸事物を産出すべく決定されているのかどうかを知らない、という限りにおいてである。

1P33S で私は可能など偶然的なものに何らの区別も設けなかったが、これはそこではこれらを正確に区別する必要がなかったからである。(4Def4)

両定義からは以下のような整理が可能である。

- (1)ある人間の有がその有の原因によって産出（定立）されるように決定されているかどうかを我々が知らない場合、その人間の有は「偶然」である
- (2)ある人間の有の原因が、その人間を産出（定立）するように決定されているかどうかを我々が知らない場合、その人間の有は「可能」である
- (3)ある人間の歩行に注目するとき、その歩行がなされるように決定されているかどうかを我々が知らない場合、その人間の歩行は「偶然」である
- (4)ある人間（すなわち歩行の内在的原因）に注目するとき、その人間が歩行をなすように決定されているかどうかを我々が知らない場合、その人間の歩行は「可能」である

スピノザは形式性を重んじて(1)と(2)の事例を定義で取り上げて対照させているが、「可能」がより一般的に適用されるのは(4)の事例である。このような「可能なもの」は、すべての個物間の相互作用を網羅した抽象的なタブローとして概念化できる。一見したところ、それは過去、現在、未来における現実的なものの観念しか含まない無限知性よりも遙かに広大な真理領域のように見えるが、実際には、その広大さは我々の側の無知の度合いに応じた不確定性と対応しており、我々の認識が現実により即したものになるにつれて縮小していく。

スピノザはこのような可能なものを「力」の名では呼ばなかった。スピノザの力の概念はあくまで、力が行使されていない局面（可能的な力）ではなく、行使されている局面（現動的な力）において理解されるべき概念である。

4.現実存在しない個物についての定理(2P8)の唯現実論的な読解

前節の考察をもとに、「現実存在しない個物についての定理」と呼ばれている定理(2P8)の唯現実論的な読解を行う。スピノザは「現実存在しない個物」を「描かれざる長方形」との類比で語るが、この定理および備考で重要なのは「描かれざる直線」そのものではなく、描かれざる直線の基盤となる円が描かれており、この点で端的な無からは区別される、という点にこそある。ある結果を「自らの力の内で」産み出すことができる原因が現実存在しているか否かこそが重要であり、この関係は入れ籠構造をとりうるが、最終的に問題になるのは、何かを産み出し得る原因の現実存在の有無である。

第9章 スピノザ主義的な力の形而上学の可能性・その2：目的論なき力の概念

アリストテレスの力は単に可能態ないし可能的な力であるだけではなく、先取られた未来である完成態（エンテレケイア）たる行為＝現実態（エネルゲイア）あるいは顕現を目指すという、明確に目的論的な原理である。スピノザの、特に「行為へのコナトゥス」には今のところ、一定の行為としての顕現へ向かうという、「先取られた未来」の要素がなお残存するとも見られる。本章はこの側面を取り上げ検討する。

本章の段階では、スピノザと通常の目的論的自然観との対決はすでに問題ではない。問題とするのは、力という概念を用いるとき、そこにアリストテレス的目的論の要素、あるいはスピノザの言う「自然の秩序の転倒」が暗黙裏に組み込まれていないかどうかという、より可視化しにくい問題である。本章で見るのは、スピノザはそのような転倒を免れているが、現代の力の理論はそのような要素を積極的に支持する、ということである。

1. 目的論的な力の概念とそうでない力の概念

「自己の有への固執のコナトゥス」は常に顕現された力だが、「行為へのコナトゥス」は、顕現に向けて決定づけられた力であるという点で、たとえ〈可能的な力〉ではなく〈現動的な力〉と言えるとしても、コナトゥスが形成された時点では顕現としての行為が未来に位置しているという意味では、未顕現の要素を含む。

このような未顕現の〈先取られた未来〉がスピノザの徹底した没目的論と両立し得るかどうかを見るためには、モリエールの戯曲に登場する「アヘンの催眠力」をどのように概念化するかに2通りの仕方があると考えるのが有益である。つまり「眠り」によって力を説明する限り、それはスピノザの言う「自然の秩序の転倒」を免れない。しかしスピノザのタームで言えば、アヘンの本性の必然性について、それがいかなる「運動と静止の比」をもち、それが人間身体の「運動と静止の比」にいかなる作用を与えるかが解明されたとすれば、あるいは現代的に考えれば、アヘンの分子構造や睡眠の生理学的、生化学的なメカニズムなどの研究に基づく、アヘンの投与から睡眠の誘発に至る因果的機構が詳細に解明されたとすれば、そのような因果的機構に「催眠力」の名を付し、その傾向性が顕現する詳細な条件の指定と共に事象の記述に用いるのは正当である。「眠り」という結果ないし最終産物はそれに先立つ作用因に概念的、存在的に依存する**被説明項(explanandum)**であって、**説明項(explanans)**の地位はもたない。

2. モルナーの力の理論とスピノザの力の理論の対比

このように、スピノザの徹底した目的論的自然観ないし「自然の秩序の転倒」批判は、力の概念に厳密な制約を課する。モルナーのような力の理論家は、スピノザ的な力を真の意味での力とは認めないかもしれない。しかしこれはある程度まで用語の定義の問題であり、本稿はスピノザ的な力の形而上学をスピノザ自身の思想に即して有意味に展開できることを示してきた。さらに、モルナーは力の概念の定義における顕現の消去不可能性を、ブレンターノの志向性概念を拡張した「物理的志向性」として位置づける点で、反自然主義的な要素を明確に導入しており、この点で現代の基準からしても問題含みである。

スピノザにおいても志向性と力および因果性の概念は密接に関連する。スピノザの場合、他動的原因における「外的帰属」が志向性概念という仕方、「自然の秩序の転倒」を含ま

ず、むしろ我々の認識における転倒を共生するような規範的な役割を、因果性の公理(1Ax4)が担うという、モルナーとは正反対の基礎付けの関係が見いだされる。

3.自己保存概念の拡張と〈常に顕在的な力〉の概念の普遍化

モルナーには、「物理的志向性」概念とは別に、「多遺伝子/多面発現」という生物学の概念を力、顕現、結果の関係に応用した、有益な考察がある。それによれば、「結果」は複数の原因の錯綜でありうるが、「顕現」と「力」は概念上一対一対応をなす。ゆえに複数の原因が錯綜する場合、「力」のみならず「顕現」も直接観察はされない。ここで仮にすべての結果において原因の錯綜が存在するとするなら、顕現あるいは顕現された力とは別に顕現されざる力を指定しても、理論的には余剰概念であるという見方も可能である。

モルナーは単独の力の顕現の余地を余興するが、スピノザの個物の因果においては、常に最低2つ、すなわち内在的原因と他動的原因の2つ以上の原因の錯綜が存在する。ここから、これまでスピノザに帰してきた図式になお残る〈顕現されざる力〉の要素を取り除き、それを〈常に顕現されている力〉に置き換えることができる。言い換えれば、他動的原因からのデテルミナチオに発する〈力が顕現するシーケンス〉を〈常に顕現された力の、結果における合成〉として読み替えることができる。

モルナーのような現代の力の形而上学は、因果概念の見直しのためにアリストテレス主義の部分的復権を試みる中で、近代科学の基本前提と相容れない目的論的思想を導入する結果になった。他方、スピノザはアリストテレス由来の力の概念を用いつつも、「可能態」と「目的因」を徹底的に排斥した力の哲学を構築した。その力の概念は、アリストテレスの目的論的自然学に対する機械論的自然学からの批判の大きな基礎になった慣性概念と多くの特徴を共有する概念となった。

第10章 「形相因」および「流出因」解釈との比較：ヴィルヤネンの解釈を中心に

本章は、本稿と極めて近い問題関心とよく似た領域を扱いつつ、対照的とも言うべきスピノザ像を描き出しているヴィルヤネン『スピノザの力の幾何学』を批判的に検討することで、スピノザ的な力の形而上学の可能な射程を見極める。

1.ヴィルヤネンの解釈の概観

ヴィルヤネンの解釈は、本稿で折に触れて批判的に言及してきた、スピノザに「形相因」を見いだす解釈の系譜に属する。但しヴィルヤネンはまたスピノザにおける個物と作用因の適切な位置づけをこの解釈の延長線上に位置づけようとする。そしてそのために、幾何学的な導出の性格と作用因的な性格を併せもつ、近世スコラ学で論じられてきた「流出因」の概念と、個物の「力」の概念に注目する。

ヴィルヤネンは、個物のコナトゥスの（本稿とは異なり状態の単なる継続という消極的な意味で解された）「慣性的解釈」と「目的論的解釈」を共に退け、個物の本質の「完全な実現の原理」として位置づける。これは、その本質のみによって理解される行為をより多く実現しようとする力である。個物は通常、外的原因に取り巻かれることでこの力を阻害されているが、外的な受動を取り除くことでそれをより多く発現させるという。

2. ヴィルヤネンの解釈の二世界論的性格

ヴィルヤネンの解釈は、「本質の完全な実現の原理」が属する、永遠の相の下で見られた個物の永遠本質の自発的な実現を個物の「能動」として位置づけ、持続の中での他の諸事物からの因果的影響を、本質の完全な実現を妨げる「受動」として位置づける。この解釈は、永遠の真実在の世界とその不完全な似姿としての持続の世界という、プラトンの二世界説を想定している。

3. 「流出因」概念の二義性

ヴィルヤネンが解釈の基礎に据えている流出因概念は、無時間的な形相因と持続の中で働く作用因という、2種類の異質な原因を同じ名の下に混交させた、アマルガムな概念である。このアマルガムな性格ゆえに、個体の永遠本質に含まれる流出因が、単なる形相因ではなく、神から独立した作用因としての「力」であり得る、という解釈が引き出され、ここに、個物が他動的原因から独立に因果的力を行行使し得る余地が開かれる。ここには、始動条件も因果的基盤も不要の力という特異な力の概念がある。永遠であり、それゆえ不変である無時間の本質が、それにも関わらず作用因的な力を備えていると考えることができれば、それを支える因果的基盤や、その始動条件を気にかける必要がなくなる。

このような永遠本質が個物の完全性と善の源泉と位置づけられているのは偶然ではなく、ヴィルヤネンのプラトン主義的解釈からの自然な帰結であり、そのような善なる秩序へ駆り立てる力としてコナトゥスを位置づける点では、その解釈は根底において目的論的である。

第1章で検討したメラメッドの、「内在的原因」に関する「形相因」解釈の近傍に位置する解釈やその他の解釈に関しても、同様の二世界説的な解釈が指摘できる。

終章：スピノザの自然主義的プログラムの成否

終章においては、まず本稿で引き出された解釈を一望するスピノザ思想の叙述を行った後、自然主義の極限と擬人主義という問題を主題化する。

スピノザの個物全般に行為者因果を見いだす本稿の解釈には、擬人主義的自然観の嫌疑が投げかけられるかもしれない。しかし、これは原則的には「自然の擬人化」であるよりも「人間の自然化」への明確な方向付けを示している。その上でさらに付け加えるなら、スピノザは現代の多くの自然主義哲学者たちと共に、あるいは彼らよりも一層先まで、人間の自然化と自然の脱擬人化を推し進めようとしているのであり、そしてこのような企図の徹底は、何が「擬人的」であり、何が「自然」であるのかの単純な線引きが難しくなるような地点へと我々を導くはずだ、ということである。さらに言えば、スピノザ哲学はこのような、〈擬人主義/自然主義〉の境界を絶えず問い直し続けるという問題を避けて通れないというだけでなく、まさにそれに正面から向き合うべき定めにある。すなわちスピノザ主義は、感情、欲求、意志、想像、感覚知覚、それに知性認識といった我々の心的、人間的な経験を、必然的で非目的論的な機械論的因果必然性に貫かれた自然の一部として、それと地続きのものとして捉える体系だからである。

この問題は「神あるいは自然」(4Praef; 4P4Dem)という定式化に直結する。伝統的に、「神」とは本質的に「行為者」であり、他方で「自然」が「行為者」と呼ばれるとしても、それ

は「擬人化」または「神格化」によってでしかない。それゆえ「神あるいは自然」という定式化をスピノザが採用した動機の1つが、行為者概念の存在論的な原初性、という哲学的真理を保存するためだったのではないか、という想定は大きな説得力をもつ。そしてこの想定が妥当なら、この定式は「神概念の保存」であるよりもむしろ「自然概念の革新」であったと見るべきであろう。この点に我々は、スピノザを「汎神論者」よりも「無神論者」と呼ぶ方が適切である、という近年説得力を取り戻してきた見解を支持するナドラーに賛同する理由を見いだす。

かくして、自由意志も目的指向性ももたない「力」の、常に現動的な行使である行為、という中心的な概念に基づいて神すなわち自然と人間自身を説明し理解することで、「自然の擬人化」と「人間の自然化」を共に超えた境地での自然とその中の人間の統一的なビジョンを与えよう、というのが、我々が明らかにしたスピノザ的な自然主義的プロジェクトである、という結論的な総括を与えることができるであろう。

文献

欧語文献

- Allison, Henry E. 1987. *Benedictus de Spinoza: An Introduction*. (Revised edition). New Heaven: Yale University Press.
- Aquinas, Thomas. 1888. *Summa Theologiae*. Textum Leoninum Romae 1888 editum ac automato translatum a Roberto Busa SJ in taenias magneticas denuo recognovit Enrique Alarcon atque instruxit.
<<http://www.corpusthomicum.org/sth1003.html>>
- Aquinas, Thomas. 1961. *Metaphysica*. (*Sententia super Metaphysicam*.) translated by John P. Rowan, html-edited by Joseph Kenny, O.P. with addition of Latin and Greek, In "St. Thomas Aquinas' Works in English" (originally compiled by Joseph Kenny) of Dominican House of Studies:
<http://dhspriority.org/thomas/Metaphysics.htm>
- Armstrong, D. M. 1978a. *Nominalism and Realism (Universals and Scientific Realism, Volume 1)*. Cambridge; New York: Cambridge University Press.
- Armstrong, D. M. 1978b. *A Theory of Universals (Universals and Scientific Realism, Volume 2)*. Cambridge; New York: Cambridge University Press.
- Armstrong, D. M. 1985. *What is a Law of Nature?* Cambridge University Press.
- Armstrong, D. M. 1993 (1968). *A Materialist Theory of the Mind* (Revised edition). London: Routledge. (邦訳 (旧版の抄訳)、D. アームストロング 1996 年『心の唯物論』鈴木登訳、勁草書房。)
- Armstrong, D. M. 1997. *A world of States of Affairs*. Cambridge; New York: Cambridge University Press.
- Armstrong, D. M. 2010. *Sketch for a Systematic Metaphysics*. Oxford, New York: Oxford University Press.
- Barbone, Steven. 2002. "What Counts as an Individual for Spinoza?" In Olli Koistinen and John Biro (eds.) *Spinoza: Metaphysical Themes*. Oxford University Press. 2002, pp.89-112.
- Bennett, Jonathan. 1984. *A Study of Spinoza's "Ethics"*. Indianapolis: Hackett.
- Bennett, Jonathan. 1991. "Spinoza's Monism: A Reply to Curley". In Yovel 1991, pp.53-59.
- Bennett, Jonathan. 2003. *Learning from Six Philosophers: Descartes, Spinoza, Leibniz, Locke, Berkeley, Hume*. Oxford; New York: Oxford University Press.
- Bernstein, Howard R. 1981. "Passivity and Inertia in Leibniz's Dynamics." in *Studia Leibnitiana* 18, pp.97-113.
- Bird, Alexthandre. 2007. *Nature's Metaphysics: Laws and Properties*. Oxford; New York: Oxford University Press.
- Brand, M. & Walton, D. (eds.) 1976. *Action Theory*. Dordrecht, Boston, and Lancaster: D. Reidel Publishing Company.
- Carone, Gabriela Roxana. 2005. *Plato's Cosmology and Its Ethical Dimensions*. Cambridge, New York: Cambridge University Press.
- Carraud, V. 2002. *Causa sive ratio. La raison de la cause, de Suárez à Leibniz*. Paris: P.U.F.
- Carriero, John. 1995. "On the Relationship between Mode and Substance in Spinoza's Metaphysics". In *Journal of the History of Philosophy* 33(2): 245-273.
- Carriero, John. 2005. "Spinoza on Final Causality". In Daniel Garber and Steven Nadler

- (eds.), *Oxford Studies in Early Modern Philosophy*. Oxford; New York: Oxford University Press, vol. 2, pp. 105-147.
- Chisholm, Roderick M. 1964a. "Human Freedom and the Self". In Gary Watson ed. *Free Will*. Oxford; New York: Oxford University Press, 1982, pp.24-35.
- Chisholm, Roderick M. 1964b "The Discriptive Element in the Concept of Action." *Journal of Philosophy* 61: 613-625.
- Chisholm, Roderick M. 1976. "The Agent as a Cause". In Brand & Walton 1976, pp.199-211.
- Cohen, I. Bernard. 1964. " 'Quantum in Se Est': Newton's Concept of Inertia to Descartes and Lucretius". In *Notes and Records of Royal Society of London*. vol.19, No.2, pp.131-155.
- Cohen, I. Bernard. 1972. Newton and Keplerian Inertia: An Echo of Newton's Controversy with Leibniz. In ed. by Allen G. Debus, *Science, Medicine and Society in the Renaissance: Essays to honor Walter Pagel*. London: Heinemann Educational Books, vol.2, pp. 199-212.
- Curley, Edwin M. 1969. *Spinoza's Metaphysics: An Essay in Interpretation*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Curley, Edwin M. 1988. *Behind the Geometrical Method: A Reading of Spinoza's Ethics*. Princeton: Princeton University Press. (邦訳、エドウィン・カーリー、『スピノザ『エチカ』を読む』関龍美、福田喜一郎 訳、文化書房新社、1993 年。)
- Curley, Edwin M. 1991. "On Bennett's Interpretation of Spinoza's Monism". In Yovel 1991, pp.35-51.
- Curley, Edwin & Walski, Gregory. 1999. "Spinoza's Necessitarianism Reconsidered." In Gennaro & Huenemann 1999, pp.241-262.
- Curley, Edwin M. 2016. "Spinoza's Metaphysics Revisited." *Spinoza a Paris 8: Seminaire International et Interdisciplinaire de Recherches Spinozistes*. (講演原稿)
- Danto, Arthur C. 1965. "Basic Actions". In *American Philosophical Quarterly* 2 (2):141 - 148.
- Davidson, Donald. 1968. "Agency". In D. Davison, *Essays on Actions and Events*. Oxford; New York: Oxford University Press, 1980, pp.43-62. (邦訳「行為者性」、ドナルド・デイヴィッドソン 1990 年、pp.64-94。)
- DeBrabander, Firmin. 2007. *Spinoza and the Stoics: Power, Politics and the Passions*. London : Continuum.
- Deleuze, Gilles. 1968. *Spinoza et le probleme de l'expression*. Paris: Editions de Minuit. (邦訳、ジル・ドゥルーズ『スピノザと表現の問題』工藤喜作、小柴康子、小谷晴勇 訳、法政大学出版局、1991 年。)
- Della Rocca, Michael 1996a. *Representation and the Mind-Body Problem in Spinoza*. Oxford, New York: Oxford University Press.
- Della Rocca, Michael. 1996b. "Spinoza's metaphysical psychology". In Garrett 1996, pp.192-266.
- Della Rocca, Michael. 2002. "Spinoza's Substance Monism". In Koistinen & Biro 2002, pp. 11-37.
- Della Rocca, Michael. 2003. "The Power of an Idea: Spinoza's Critique of Pure Will." *Noûs*, 37(2): 200-231.
- Della Rocca, Michael. 2008. "Rationalism Run Amok: Representation and the Reality of Emotions in Spinoza." In *Interpreting Spinoza: Critical Essays*. ed. by Charlie Huenemann, Cambridge: Cambridge University Press, 2008, pp.26-52.

- Des Chene, Dennis. 1996. *Physiologia: Natural Philosophy in Late Aristotelian and Cartesian Thought*. Ithaca and London: Cornell University Press.
- Descartes, René. 1964-1974. *Oeuvres de Descartes*. C. Adam and P. Tannery eds. Paris: Vrin. (AT と略称)
- Diels, Hermann & Kranz, Walther. 1954. *Die Fragmente der Vorsokratiker, griechisch und deutsch*. Berlin : Weidmann.
- Ellis, Brian. 2001. *Scientific Essentialism*. Cambridge; New York: Cambridge University Press.
- Foucher de Careil, Louis Alexandre. 1854. " Memoire sur la par Refutation inedite de Spinoza par Leibniz." in Foucher de Careil, *Refutation inedite de Spinoza par Leibniz procedee d'un memoire par A. Foucher de Careil*. Paris, 1854.
- Gabbey, Alan. 1980. "Force and Inertia in Seventeenth Century: Descartes and Newton". In *Descartes: Philosophy, Mathematics, and Physics*. Stephen Gaukroger ed. Sussex: Harvester, pp.230-320.
- Garber, Daniel. 1993. *Descartes' Metaphysical Physics*. Chicago and London: The University of Chicago Press.
- Garber, Daniel. 1997. "Descartes and Spinoza on Persistence and Conatus." *Studia Spinozana*, 10: 43-67.
- Garber, Daniel. 2009. *Leibniz: Body, Substance, Monad*. Oxford, New York: Oxford University Press.
- Garrett, Don. 1991. "Spinoza's Necessitarianism." In Yovel 1991, pp.97-118.
- Garrett, Don. 1996. *The Cambridge Companion to Spinoza*. Cambridge; New York: Cambridge University Press.
- Garrett, Don. 1999. "Teleology in Spinoza and Early Modern Rationalism". In Gennaro & Huenemann 1999, pp.310-335.
- Garrett, Don. 2002. "Spinoza's conatus argument". In Koistinen & Biro 2002, pp.127-158.
- Gassendi, Petrus. 1964. *Opera omnia*. Stuttgart : Frommann.
- Gennaro, Rocco J. & Huenemann, Charles (eds.) *New essays on the rationalists*. Oxford; New York: Oxford University Press.
- Gilead, Amihud. 1990. "Spinoza's two causal chains." *Kant-Studien*, 81: 454-475
- Goff, Philip. 2012. *Spinoza on Monism (Philosophers on Depth)*. Palgrave Macmillan.
- Griffith, Meghan. 2017. "Agent Causation." In eds. by Kevin Timpe, Meghan Griffith & Neil Levy, *The Routledge Companion Companion to Free Will*. Oxford: Routledge, pp.72-85.
- Harré, Rom. 1970. "Powers". In *British Journal of Philosophy*, 21: 81-101.
- Harré, Rom & Madden, Edward. H. 1975. *Causal Powers: A Theory of Natural Necessity*. Oxford; New York: Basil Blackwell.
- Heereboord, Adriani 1654. *Meletemata philosophica*.(スピノザ協会保管の、鈴木泉氏によるフランス国立館所蔵版よりの複写版)。
- Heil, John. 2003. *From an Ontological Point of View*. Oxford; New York: Oxford University Press.
- Hempel, Carl G. & Oppenheim, Paul. 1948. "Studies in the Logic of Explanation." in *Philosophy of Science*, Vol. 15, No. 2, pp. 135-175.
- Hobbes, Thomas. 1962 (1655, 1839-45). *Elementorum philosophiae sectio prima de Corpore*. In

- Thomas Hobbes (labore Gulielmi Molesworth). *Thoma Hobbes Malmesburiensis opera philosophica qua latine scripsit omnia*. Aalen : Scientia, vol. I. (邦訳、トマス・ホッブズ『哲学原論第 1 巻——物体論』、『哲学原論 自然法および国家法の原理』伊藤宏之、渡辺秀和訳、柏書房、2012 年、pp.7-550.)
- Hobbes, Thomas. 2003 (1651). *Thomas Hobbes Leviathan*. G.A.J. Rogers & Karl Schumann eds. Bristle: Toemmes Continuum. (ホッブズ 1992 年 (原著 1653 年)『リヴァイアサン』(全 4 巻)、水田洋訳、岩波文庫。)
- Huenemann, Charles. 1999. "The Necessity of Finite Modes and Geometrical Containment in Spinoza's Metaphysics." In Gennaro & Huenemann 1999, pp.224-240.
- Hume, David 1998 (1779). *Dialogues Concerning Natural Religion* (second edition). Richard H. Popkin ed. with introd. Indianapolis; Cambridge: Hackett Publishing Company. (邦訳、デイヴィッド・ヒューム 1989 年 (改版)『自然宗教に関する対話』、福鎌忠恕、斎藤繁雄訳、法政大学出版局。)
- Jammer, Max. 2010 (1961). *Concepts of Mass in Classical and Modern Physics*. New York: Dover Publications. (邦訳：マックス・ヤンマー、1977 年、『質量の概念』大槻義彦、葉田野義和、斉藤威訳、講談社)
- Jarrett, Charles. 1977. "The Concept of Substance and Mode in Spinoza." *Philosophia* 7: 83-105.
- Johnson, Monte Ransom. 2003. "Was Gassendi an Epicurean?" in *History of Philosophy Quarterly*, vol. 20, No. 4, pp. 339-360.
- Knuuttila, Simo. 2013 (1999). "Medieval Theories of Modality", in *Stanford Encyclopedia of Philosophy*, First published Wed Jun 30, 1999; substantive revision Tue Feb 5, 2013. <https://plato.stanford.edu/entries/modality-medieval/>
- Koistinen, Olli. 2003. "Spinoza's Proof of Necessitarianism", in *Philosophy and Phenomenological Research*, 67, 283-310.
- Koistinen, Olli & Biro, John (eds.). 2002. *Spinoza : metaphysical themes*. Oxford; New York: Oxford University Press.
- Koistinen, Olli (ed.) 2009a *The Cambridge Companion to Spinoza's Ethics*. Cambridge; New York: Cambridge University Press.
- Kolnai, A. 1968 "Agency and freedom". In *The Human Agent*. G. Vesey ed. London ; Melbourne [etc.]: Macmillan, pp.20-46.
- Koyré, Alexandre. 1957. *From the closed world to the infinite universe*. Baltimore: Johns Hopkins Press. (邦訳、アレクサンドル・コイレ『閉じた世界から無限宇宙へ』横山雅彦訳、みすず書房、1973 年；『コスモスの崩壊——閉ざされた世界から無限の宇宙へ (復刊新装版)』野沢協、白水社、1999 年。)
- Leibniz, G. W. 1875-90. *Die Philosophischen Schriften*. C. I. Gerhardt verausgeb. Berlin: Weidmannsche Buchhandlung.
- Leibniz, G. W. 1860. *Leibnizens Mathematische Schriften*. band.6.C.I. Gerhardt verausgeb. Halle : H.W. Schmidt.
- Leibniz, G.W. 2013. (Translated, Edited, and with an Introduction by Paul Lodge) *The Leibniz-De Volder Correspondence: With Selections from the Correspondence Between Leibniz and Johann Bernoulli*. New Heaven: Yale University Press.
- Lin, Martin 2004. "Spinoza's Metaphysics of Desire: The Demonstration of IIP6", *Archiv für Geschichte der Philosophie* 86: 21-55.
- Locke, John. 1975 (1689). *An Essay concernig Human Understanding*. ed. with intrid. by Pteter

- H. Nidditch. Oxford: Oxford Clarendon Press. (邦訳、ジョン・ロック、『人間知性論 (全4巻)』大槻晴彦訳、岩波文庫、1972年～1977年。)
- Lowe E. J. 2006. *The Four-Category Ontology: A Metaphysical Foundation for Natural Science*. Oxford; New York: Oxford University Press.
- Lowe E. J. 2008. *Personal Agency: The Metaphysics of Mind and Action*. Oxford; New York: Oxford University Press.
- Mancosu, Paolo. 1996. *Philosophy of Mathematics and Mathematical Practice in the Seventeenth Century*. Oxford; New York: Oxford University Press.
- Manning, Richard N. 2002. "Spinoza, thoughtful teleology, and the causal significance of content". In Koistinen & Biro 2002, pp.182-209.
- Markosian, Ned. 1999. "A Compatibilist View of the Theory of Agent Causation." *Pacific Philosophical Quarterly*, 80, pp. 257-77.
- Markosian, Ned. 2010. "Agent Causation as the Solution to All the Compatibilist's Problems." *Philosophical Studies*, 157, pp. 383-98.
- Martin, C.B. 1994. "Dispositions and Conditionals". In *Philosophical Quarterly* 63: 305-11.
- Martin, C. B. 1997. "On the need for properties: the road to Pythagoreanism and back", *Synthese*, 112: 193-231.
- Mason, Richard. 2007. *Spinoza: Logic, Knowledge and Religion*. Ashgate. (Ch.3 は Koistinen & Biro 2002, pp.73-88, "concrete logic"のリライト).
- McCauley, Robert N. 2000. "The Naturalness of religion and the unnaturalness of science", In *Explanation and Cognition*. F. Keil and R. Wilson eds. Cambridge, Massachusetts: MIT Press, 61-85.
- Melamed, Yitzhak Y. 2009. "Spinoza's Metaphysics of Substance: The Substance-Mode Relation as a Relation of Inherence and Predication." *Philosophy and Phenomenological Research* 78(1), pp.17-82.
- Melamed, Yitzhak Y. 2012. "Spinoza on Inherence, Causation, and Conception." In *The Journal of the History of Philosophy*, vol. 50, no.3, pp.365-386.
- Millikan, Ruth Garrett. 1984. *Language, thought, and other biological categories: new foundations for realism*. Cambridge, Massachusetts: MIT Press.
- Molnar, George. 2003. *Powers : a study in metaphysics*. Stephen Mumford ed. with introd. Oxford; New York: Oxford University Press.
- Morrison, John. 2014. "Restricting Spinoza's Causal Axiom." (未出版の草稿で、下記より最終版の草稿が閲覧できる。)
<<http://www.columbia.edu/~jrm2182/Morrison.Restricting.Spinoza.Causal.Axiom.pdf>>
- Mumford, Stephen. 2004. *Laws in Nature*. New York: Routledge.
- Mumford, Stephen. 2007. *David Armstrong*. UK: Acumen.
- Nadler, Steven. 2006. *Spinoza's Ethics : an introduction*. Cambridge; New York: Cambridge University Press.
- Nelkin, Dana. 2011. *Making Sense of Freedom and Responsibility*. Oxford: Oxford University Press.
- Newlands, Samuel. 2013. "Spinoza's Modal Metaphysics", in *Stanford Encyclopedia of Philosophy*. (First published Tue Aug 21, 2007; substantive revision Tue Oct 15, 2013)

<http://plato.stanford.edu/entries/spinoza-modal/>

- O'Connor, Timothy. 1995. "Agent causation". In *Agents, Causes, and Events*. Timothy O'Connor ed. Oxford; New York: Oxford University Press, pp.173-200.
- O'Connor, Timothy. 2000. *Persons and Causes: The Metaphysics of Free Will*. Oxford; New York: Oxford University Press.
- Osler, Margaret J. 1994. *Divine Will and the Mechanical Philosophy: Gassendi and Descartes on Contingency and Necessity in the Created World*. Cambridge, New York: Cambridge University Press.
- Papineau, David. 2015 (first published in 2007). "Naturalism". In *Stanford Encyclopedia of Philosophy*. <https://plato.stanford.edu/entries/naturalism/> (2018 年 9 月 9 日 閱覽)
- Pereboom, Derk. 2001. *Living without Free Will*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Pereboom, Derk. 2015. "The Phenomenology of Agency and Deterministic Agent Causation", in Hans Pedersen & Megan Altman (eds.), *Horizons of authenticity in phenomenology, existentialism, and moral psychology: essays in honor of Charles Guignon*, Dordrecht: Springer, pp. 277-294.
- Pietarinen, Juhani. 2003. "Spinoza on Causal Explanation of Action". In *Realism in Action: Essays in the Philosophy of the Social Sciences*. Matti Sitonen, Petri Ylikoski & Kaarlo Miller eds. Dordrecht ; Boston : Kluwer Academic Publishers, pp.137-54.
- Pietarinen, J. & Viljanen, V. (eds.) 2009. *The World as Active Power: Studies in the History of European Reason*. Leiden: E. J. Brill
- Rice., Lee C.. 1991. "Tanquam Naturae Humanae Exemplar: Spinoza on Human Nature." in *The Modern Schoolman*, vol.68, Issue 4, pp. 291-303.
- Sangiaco, Andrea. 2015. "The Ontology of Determination: From Descartes to Spinoza." In *Science in Context*, Vol. 28, Issue 04, pp 515 - 543.
- Schrijvers, Michael. 1999. "The Conatus and the Mutual Relationship Between Active and Passive Affects in Spinoza." In Yovel 1999, pp.63-80.
- Shoemaker, Sydney 1980 "Causality and Properties". In *Time and Cause*. P. van Inwagen ed. Dordrecht: D. Reidel, pp.109-35. (Reprinted in *Properties*. D. H. Mellor & Alex Oliver eds. Oxford; New York: Oxford University Press, 1997, pp.228-254.)
- Spinoza, Benedictus de. 1925. *Spinoza Opera*. Carl Gebhardt ed. Heiderberg: Carl Winters, Universitätsbuchhandlung.
- Spinoza, Benedictus de. 1985. *The Collected Works of Spinoza*. Edwin Curley ed. & trans. Princeton; New Jersey: Princeton University Press.
- Spinoza, Benedictus de. 1986. *Korte Verhandling / Breve Trattato*. Philippo Mignini introduzione, edizione, traduzione e commento, L'Aquila: L.U Japadre Editore.
- Spinoza, Benedictus de. 2002. *Spinoza Complete Works*. Samuel Shirley trans. & Michael L. Morgan ed. introd. & notes, Indianapolis; Cambridge: Hackett Publishing Company.
- Steinberg, Diana Burns. 1984. " Spinoza's Ethical Doctrine and the Unity of Human Nature." In *Journal of the History of Philosophy*, 22(3): 303-324
- Taylor, Richard. 1966. *Action and Purpose*. Englewood Cliffs, New Jersey: Prentice Hall.
- Taylor, Richard. 1974. *Metaphysics (2nd edition)*. Englewood Cliffs, New Jersey: Prentice Hall.
- Thalberg, Irving. 1967. "Do we cause our own actions?" In *Analysis* 27: 196-201.
- Thalberg, Irving. 1976. "How does agent causality work?" In Brand & Walton 1976, pp.

213-238.

- Viljanen, Valtteri. 2008. "On the Derivation and Meaning of Spinoza's Conatus Doctrine". In Daniel Garber & Steven Nadler eds. *Oxford Studies in Early Modern Philosophy*, volume IV. Oxford: Clarendon Press, pp.89-112.
- Viljanen, Valtteri. 2009a. "Spinoza's Actualist Model of Power". In Pietarinen & Viljanen 2009, pp. 213–228.
- Viljanen, Valtteri 2009b "Spinoza's Ontology". In Koistinen 2009a, pp.56-78.
- Viljanen, Valtteri. 2011. *Spinoza's Geometry of Power*. New York: Cambridge University Press.
- Wegber, Daniel M.. 2002. *The Illusion of Conscious Will*. Cambridge, Mass: MIT Press.
- Wolfson, Harry Austin. 1934. *The Philosophy of Spinoza: Unfolding the Latent Process of His Reasoning*. vol. I & II (合本) . Cambridge; Massachusetts; London; England: Harvard University Press.
- Yolton, J. 1966 "Agent causality". In *American Philosophical Quarterly* 3: 14-26.
- Yovel, Yirmiyahu. 1991. *God and Nature: Spinoza's Metaphysics*. Leiden: E. J. Brill.
- Yovel, Yirmiyahu. 1999. *Desire and Affect : Spinoza as Psychologist*. New York: Litte Room Press.

翻訳文献

- アリストテレス 1961 年『形而上学』出隆訳、岩波書店。
- カーリー、エドウィン・M. 1996 年（原著 1984 年）「デカルトの永遠真理創造説」小泉義之訳、デカルト研究会編『現代デカルト論集 II・英米編』、勁草書房、pp.243-282。
- キケロー 2000 年「神々の本性について」山下太郎訳、キケロー『哲学 IV（キケロー選集第 11 巻）』所収、岩波書店。
- クリプキ、ソール・A 1985 年（原著 1972 年）『名指しと必然性——様相の形而上学と心身問題』八木沢敬、野家啓一訳、勁草書房。
- コイレ、アレクサンドル 1988 年（原著 1939 年）『ガリレオ研究』菅谷暁 訳、法政大学出版局。
- サイモンズ、ピーター 2006 年（原著 1994 年）「個別の衣をまとった個別者たち——実体に関する 3 つのトロープ説」、柏端達也/青山拓央/谷川卓 編訳 『現代形而上学論文集』勁草書房、pp.251-301. (Simons, Peter. 1994. "Particulars in Particular Clothing: Three Trope Theories of Substance". In *Philosophy and Phenomenological Research* 54. pp.553-575)。
- シュペーマン、ローベルト/レーヴ、ラインハルト 1987 年（原著）『進化論の基盤を問う——目的論の歴史と復権』山脇 直司、朝広 謙次郎、大橋 容一郎 訳、東海大学出版会 (Robert Spaemann & Reinhard Löw, *Die Frage wozu? : Geschichte und Wiederentdeckung des teleologischen Denkens* Munchen: Piper, 1981)。
- スチュアート、マシュー 2011 年（原著 2005 年）『宮廷人と異端者——ライプニッツとスピノザ、そして近代における神』桜井直文、朝倉友海訳、書肆心水。
- スピノザ 1955 年『神・人間及び人間の幸福に関する短論文』畠中尚志訳、岩波文庫。
- スピノザ 1975 年『エチカ（倫理学）・上』畠中尚志訳、岩波文庫。
- ソーバー、エリオット 2009 年（原著第 2 版 2000 年）『進化論の射程——生物学の哲学入門』、松本俊吉、網谷祐一、森元良太訳、春秋社。
- タフコ、トゥオマス・E、2015 年（原著 2012 年）年、『アリストテレス的現代形而上学』、加地大介、鈴木生郎、秋葉剛史、谷川卓、植村玄輝、北村直彰訳、春秋社。

- チャーチランド、ポール・M. 1997 年 (原著 1995 年) 『認知哲学：脳科学から心の哲学へ』 信原幸弘、宮島昭二訳、産業図書。
- デイヴィッドソン、ドナルド 1990 年、『行為と出来事』服部浩幸、柴田正良 訳、勁草書房、1990 年。
- ディオゲネス・ラエルティオス 1994 年『ギリシャ哲学者列伝 (下)』加来彰俊訳、岩波文庫。
- デネット、ダニエル C. 2001 年 (原著 1996 年) 『ダーウィンの危険な思想——生命の意味と進化』山口泰司監訳、青土社。
- デネット、ダニエル C. 2015 年(原著 2013 年) 『思考の技法——直観ポンプと 77 の思考術』阿部文彦、木島泰三訳、青土社。
- デネット、ダニエル C. 2018 年(原著 2017 年) 『心の進化を解明する——バクテリアからバツハへ』木島泰三訳、青土社。
- ドーキンス、リチャード 1993 年 (原著 1986 年) 『ブラインド・ウォッチメイカー——自然淘汰は偶然か? (上巻)』中嶋康裕、遠藤彰、遠藤知二、疋田努訳、日高敏隆監修、早川書房。
- ドブbs、B.J.T. 2000 年 (原著 1991 年) 『錬金術師ニュートン——ヤヌス的天才の肖像』、大谷隆和訳、みすず書房。
- ドレツキ、フレッド 2005 年(1988 年) 『行動を説明する——因果の世界における理由』水本正晴訳、勁草書房 (Fred Dretske. 1988. *Explaining behavior : reasons in a world of causes*. Cambridge, Massachusetts: MIT Press, 1988)。
- ニュートン、アイザック 1979 年 (原著 1687 年) 『自然哲学の数学的原理』河辺六男訳、『ニュートン (世界の名著・32)』中央公論社、pp.47-568. (Newton, Isaac. 1687. *Philosophiae Naturalis Principia Mathematica*. In Cambridge Digital Library: <<http://cudl.lib.cam.ac.uk/view/PR-ADV-B-00039-00001/>>)。
- ハンプシャー、スチュアート 1979 年 (原著 1951 年)、『スピノザ』中尾隆司訳、行路社。
- プラトン 1975 年 『プラトン全集・第 12 巻』、岩波書店。
- プライア、エリザベス・W /パーゲッター、ロバート/ジャクソン、フランク 2006 年 (原著 1982 年) 「傾向性についての 3 つのテーゼ」柏端他 2006 年、pp.229-249 (Elozabeth W. Prior,, Robert Pargetter and Frank Jackson, "Three Theses about Dispositions", *American Pholosophical Quarterly* 19. 1982. pp.251-257)。
- フリュー、アントニー / ヴィージー、ゴットフリー 1989 年 (原著 1987 年) 『行為と必然性——決定論的世界観と道徳性』服部裕幸訳、産業図書(Flew, Antony G. N. & Vesey, Godfrey N.A. 1987. *Agency and Necessity* Oxford; New York: Basil Blackwell)。
- ブレイエ、エミール 2006 (原著 1908 年) 『初期ストア哲学における非物体的なものの理論』江川隆男訳、月曜社
- ボイヤー、パスカル 2009 年 (原著 2001 年) 『神はなぜいるのか?』鈴木光太郎、中村潔 訳、NTT 出版。
- ボウラー、ピーター・J 1992 年 (原著 1988 年) 『ダーウィン革命の神話』松永俊男訳、朝日新聞。
- マシュレ、ピエール 1986 年 (原著 1979 年) 『ヘーゲルかスピノザか』桑田禮彰、鈴木一策訳、新評論 (Macherey, Pierre. 1979. *Hegel ou Spinoza*. Paris: Maspero)。
- ミリカン、ルース・ギャレット 2004 年 「バイオセマンティックス」前田高弘訳、信原 2004 年 b、pp.51-84. (Millikan, Ruth G. 1989. *the Journal of Philosophy* 86: 281-291)。
- ミリカン、ルース・G. 2007 年『意味と目的の世界：生物学の哲学から』信原幸弘訳、勁草

- 書房(Ruth Garrett Millikan. 2006 Varieties of meaning : the 2002 Jean Nicod lectures.Cambridge, Massachusetts: MIT Press, 2006)。
- モリエール 2002 年 (原著 1673 年)「病は気から」、秋山伸子訳、ロジェ・ギシュメール、廣田昌義、秋山伸子編、『モリエール全集』第 9 巻、臨川書店、pp.253-418。
- ラ・メトリ 1949 年 (原著 1750 年)『エピクロスの体系』、『ラ・メトリ著作集 (上巻)』青木雄造、杉捷夫訳、実業之日本社、pp.265-313. (La Mettrie, Julien Offray de. 1750. *Système d'Épiqueure*. In Feedbooks: <<http://fr.feedbooks.com/book/4223/système-d-épiqueure>>。
- ライプニッツ 1989 年 a『ライプニッツ著作集 9・後期哲学』、下村寅太郎、山本信、中村幸四郎、原享吉 監修、工作舎。
- ライプニッツ 1989 年 b「生命の原理と形成的自然についての考察」佐々木能章訳、pp.9-19。
- ライプニッツ 1989 年 c「デ・フォルダー宛書簡」佐々木能章訳、ライプニッツ 1989 年 a、pp.61-129。
- ライプニッツ 1989 年 d「モノドロジー (哲学の原理)」西谷裕作訳、ライプニッツ 1989 年 a、pp.205-241。
- ライプニッツ 1990 年「形而上学叙説」、『ライプニッツ著作集 8・前期哲学』、下村寅太郎、山本信、中村幸四郎、原享吉 監修、工作舎、pp.137-211。
- ライプニッツ 1991 年『ライプニッツ著作集 7・宗教哲学『弁神論』下』、下村寅太郎、山本信、中村幸四郎、原享吉 監修、工作舎。
- ライプニッツ 1999 年『ライプニッツ著作集 3・数学、自然学』、下村寅太郎、山本信、中村幸四郎、原享吉 監修、工作舎。
- ライプニッツ / クラーク 1989 年「ライプニッツとクラークとの往復書簡」、ライプニッツ 1989 年 a、pp.263-428。
- ラッセル、バートランド 1960 年 (原著 1948 年)『人間の知識 (第 2 巻)』鎮目恭夫訳、みすず書房。
- リベット、ベンジャミン 2005 年『マインド・タイム——脳と意識の時間』下條信輔訳、岩波書店。
- ルクレティウス 1961 年『物の本質について』樋口勝彦訳、岩波文庫。
- ロジェ、ジャック 1994 年 (原著 1986 年)「生命の機械論的概念」、家田貴子、原純夫訳、D.C.リンドバーグ、R.L. ナンバーズ編『神と自然——歴史における科学とキリスト教』、渡辺正雄監訳、みすず書房、pp.307-328。

日本語原著文献

- 秋保亘 2015 年「Ratio seu Causa——『エチカ』における原因と理由」、『スピノザーナ——スピノザ協会年報』、第 14 号、pp.41-70。
- 朝倉友海 2012 年『概念と個別性——スピノザ哲学研究』、東信堂。
- 朝倉友海 2014 年「渦巻きと折開き」、『流砂』第 7 号、pp.191-205。
- 朝倉友海 2015 年「偏倚・差異・即非——旋渦の思考について」、『流砂』第 8 号、pp.190-206。
- 上野修 2009 年「ライプニッツとスピノザ——現実性をめぐって——」、『哲学の探究』No.36、pp.5-21。
- 植原亮 2017 年『自然主義門——知識・道徳・人間本性をめぐる現代哲学ツアー』勁草書房。
- 大野岳史 2013 年「スピノザの存在論における自己原因の役割」『スピノザーナ』第 13 号、pp.85-104。
- 加地大介 2004 年、「分析哲学における伝統的形而上学の復興」、『現代思想』2004 年 7 月号、pp.166-178。

- 柏端達也 1997 年『行為と出来事存在論——デイヴィドソンの視点から』勁草書房。
- 柏端達也/青山拓央/谷川卓 編訳 2006 年『現代形而上学論文集』勁草書房。
- 柏葉武秀 2010 年「存在しないものの存在論」『スピノザーナ』第 10 号、pp.35-53。
- 河村厚 1999 年「認識と道徳——コールバーグとスピノザを手がかりに」、『臨床哲学』1 号、1999 年、pp.43-55（河村厚『存在・感情・政治——スピノザへの政治心理学的接近——』関西大学出版部、2013 年、pp.365-381）。
- 河村厚 2004 年「保存と増大——『エチカ』におけるコナトゥスの自己発展性とその必然性について」、『メタフュシカ』、pp.101-133（河村 2013 年、第 1 章、pp.21-38）。
- 木島泰三 2000 年「ホッブズにおける「性格的徳 Moral Virtues」について」『倫理学年報』第 49 集、pp.71-84。
- 木島泰三 2002 年 a「スピノザにおける人間精神の認知的働きと動機的働きの統一」『法政大学文学部紀要』第 47 号、pp.21-42。
- 木島泰三 2003 年「スピノザの人間論における「目的」概念の適切な定位——『エチカ』第 3 部定理 12 と定理 28 の検討」『スピノザーナ——スピノザ協会年報』第 4 号、pp.99-117。
- 木島泰三 2005 年「スピノザの心身論再考——一元論的解釈と二元論的解釈を共に超える試み」（口頭発表）スピノザ協会第 38 回研究会、京大会館。
- 木島泰三 2011 年 a「現代形而上学から見たスピノザ——様態論を中心に」（口頭発表）スピノザ協会第 22 回総会講演。
- 木島泰三 2011 年 b「スピノザにおける決定論的行為者因果説」（口頭発表）日本倫理学会第 62 回大会、富山大学。
- 木島泰三 2012 年 a「スピノザの複合物体論の「決定論的行為者因果説」解釈からの読み直し」『法政大学文学部紀要』第 65 号、pp.31-45。 <<http://hdl.handle.net/10114/7443>>
- 木島泰三 2012 年 b「(研究ノート) 現代形而上学から見たスピノザ——様態論を中心に」『スピノザーナ——スピノザ協会年報』第 12 号、pp.123-141。
- 木島泰三 2013 年 a 年 "Is Philo a forerunner of Darwin? : on Epicureanism in Hume's Dialogues"（口頭発表）法政エラスムス・スミンドゥス/木島泰三・オケ講演会、法政大学。
- 木島泰三 2013 年 b「スピノザの決定論的行為者因果説とその倫理学的含意」『倫理学年報』（日本倫理学会発行）、第 62 集、pp.101-115。
- 木島泰三 2013 年 c「「現実的本質」の概念とスピノザ『エチカ』第 3 部定理 6 の証明——第 1 部定理 36 および第 3 部定理 7 との関連において」『スピノザーナ——スピノザ協会年報』第 13 号、pp.105-125。
- 木島泰三 2015 年 a「スピノザにおける偶然性の意義——エピクロス主義者スピノザ？」（口頭発表）、法政哲学会第 35 回大会、法政大学。
- 木島泰三 2015 年 b「ライブニッツ・デ・フォルダー往復書簡における惰性[inertia]の議論——ガーバーの解釈の評価と批判」（口頭発表）、日本ライブニッツ協会第 7 回大会、帝京大学。
- 木島泰三 2016 年 a「偶然性としての必然性——スピノザによる必然主義からの目的論批判と、その古代エピクロス主義との親近性」、『法政哲学』第 12 号、pp.1-12。
<<http://hdl.handle.net/10114/12316>>
- 木島泰三 2016 年 b「スピノザにおける偶然性の意義——有限者における偶然性と必然性との創造的結合と、その古代および近代エピクロス主義との比較」、『法政大学文学部紀要』第 72 号、pp.59-76。 <<http://hdl.handle.net/10114/12091>>
- 木島泰三 2017 年「現代英語圏におけるスピノザ読解——分析形而上学を背景にした、スピ

- ノザの必然性概念をめぐる側面的考察」上野修・米虫正巳・近藤和敬編著『主体の論理・概念の倫理——二〇世紀フランスのエピステモロジーとスピノザ主義』pp.399-415。
- 木島泰三 近刊「ヒューム『自然宗教に関する対話』のエピクロスの宇宙論とダーウィン主義」田上孝一・本郷朝香編著、『原子論集（仮題）』法政大学出版局、掲載予定。
- 九鬼周三 2012 年（初版 1935 年）『偶然性の問題』岩波文庫。
- 近藤智彦 2010 年「自由意志と目的論の帰趨——ストア派とスピノザ——」『スピノザーナ』第 10 号、pp.55-79
- 桜井直文 1996 年「スピノザのマテリアリズム——スピノザにおける「内在因」の思想」、『現代思想』臨時増刊号第 24 巻 14 号、pp.168-175。
- 佐藤一郎 2004 年『個と無限——スピノザ雑考』風行社。
- 沢崎壮宏 2015 年「有機組織体という機械——ラ・メトリにおける偶然」（口頭発表）、日仏哲学会秋期研究大会、2015 年 9 月 12 日、立教大学。
- 戸田山和久 1999 年、「科学哲学のラディカルな自然化」『科学哲学』vol. 32-I, pp. 29-43。
- 戸田山和久 2014 年、『哲学入門』筑摩書房（ちくま新書）。
- 内藤淳 2007 年『自然主義の人権論——人間の本性に基づく規範』、勁草書房。
- 中村雅之 2004 年「表象なき認知」、信原幸広編『シリーズ心の哲学Ⅱ ロボット編』、勁草書房、pp.85-117。
- 信原幸弘（編） 2004 年 a『シリーズ心の哲学Ⅰ——人間篇』、勁草書房。
- 信原幸弘（編） 2004 年 b『シリーズ心の哲学Ⅱ——ロボット篇』、勁草書房。
- 信原幸弘（編） 2004 年 c『シリーズ心の哲学Ⅲ——翻訳篇』、勁草書房。
- 信原幸弘 1999 年『心の現代哲学』、勁草書房。
- 平松希伊子 1996 年「デカルトにおける「衝突則」再考」、『思想』No.869 (1996 年 11 月号)、岩波書店、pp.242-260。
- 藤野幸彦 2013 年「スピノザ『エチカ』における様態概念の解釈——ベネットの"Field metaphysic"をめぐる——」（口頭発表）スピノザ協会第 61 回研究会、明治大学和泉キャンパス。
- 藤野幸彦 2015 年「スピノザ『エチカ』における様態概念の解釈——個体としての個物とその存在論的身分について」、『スピノザーナ——スピノザ協会年報』第 14 号、pp.119-144。
- 松田克進 2009 『スピノザの形而上学』、昭和堂。
- 松永俊男 1996 年『ダーウィンの時代——科学と宗教』名古屋大学出版会。
- 松山寿一 2006 年「クロス討論・シェリングとスピノザ、司会報告」、『シェリング年報』第 14 号、pp.68-73。
- 吉田量彦 2014 年「自分を大切にするのはエゴイズムか——スピノザとカントにおける自己保存の思想——」、『東京国際大学論叢 商学部編』第 90 号、pp.63-81。